# 『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(2)

## —— 第三部(§§192-299)の分析を通じて ——

鬼 界 彰 夫

哲学の偉大な成果の或るものは、一緒になると思い込まれた本を引き出して別々の棚に置くのに比べる以外はない。それらの本は今後並ぶことがないということをのぞけば、本の置き場所について何ら最終的な成果はない。この仕事の難しさを知らない傍観者はこういう場合何らの成果もないと思いがちである。—哲学で難しいのは自分で知っていること以上には何も言わないことである。例えば、二冊の本を正しい順に並べたところで、それが最終的な場所においたわけではないことを承知する難しさである。

(『青色本』より)

本稿は『確実性』第三部(§§193-299)のウィトゲンシュタインの思考運動の構造と到達点の解明を目的とする。『確実性』第三部は読解困難なテキストである。この困難はウィトゲンシュタインの思考の大規模でダイナミックな転換に起因するものである。それは『確実性』第二部において水面下で徐々に形成された思考の力学的緊張の開放であり、これまでの思考運動により準備されたものである。しかるべき背景の下で眺められるならそれは必然的で有意味な展開として現れるが、そうした背景から切り離される場合唐突な思考の変化と映らざるをえない。その時第三部は対立する思考を内包する混乱したものとして現れる。この表面上の対立と混乱により『確実性』第三部のテキストは読者にとって困難なものとなるのである。本論考は第三部のテキストをしかるべき文脈に置くことによってこうした困難を排除し、ウィトゲンシュタインの思考を本来の姿で捉えようと

する。そうした分析の結果として、『確実性』第三部においてウィトゲンシュタインが「認識論的自然権を持つ共同確実性としてのムーア知」と形容しうる思考に最終的に到達したと本稿は結論する。

## 1『確実性』第三部のスレッドとシークェンス

『確実性』第三部の思考運動の分析に着手する前にその見取り図（図1）とサブシークェンス・スレッド図（図2）によって第三部のテキストの形式的区切り構造と登場する思考領域を示したい。これらの表の構成と意味は前稿[1]において述べたものと同じである。この表の唯一の新しい要素はスレッドδ′＜確実性＞である。これはスレッドδ＜知識＞から派生した思考の糸であり、確実性という思考領域を構成する。スレッドδが「知識とは何か」という問いに係わるのに対しスレッドδ′は「確実性とは何か」、「ある事が確実であるとは何を意味するのか」という問いに係わる。この問いを巡るウィトゲンシュタインの思考は例えば次のような形で表現されている。

> 「確実」という言葉によって我々は完全な確信、どのような疑いも無いことを表し、そしてそれによって他人を納得させようとする。これが主観的確実性である。・・・（§194）[2]

> 「私には自分の確信について有力な根拠がある。」　この根拠が確実性を客観的なものにする。（§270）

スレッドδ′＜確実性＞が独立したスレッドではなくスレッドδ＜知識＞の派生スレッドであるのは、それらが生み出す思考が複雑な関係を通じて結合と分離を繰り返すからである。「確実性」という主題そのものについては6.1で改めて論じる。

---

[1] 拙稿「『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(1)」、『言語文化論集』vol.49：39－127,1999,のpp.41－44を参照されたい。
[2] 本稿におけるウィトゲンシュタインのテキストの引用は特記した場合を除いてすべて拙訳を用いた。

## ＜図１　『確実性』第三部の見取り図＞

| シークェンスとその内容 | | 各シークェンスを構成するスレッド | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | ムーア解釈 | 限界 | 限界の無根拠性 | 限界の起源 | 知識 | 確実性 |
| | | $\alpha$ | $\beta$ | $\beta'$ | $\beta''$ | $\delta$ | $\delta'$ |
| I 193-206 | 客観的確実性と真理諸概念の言語ゲーム内性 | | | $\beta'$ | | | $\delta'$ |
| 207 | ＜標本＞ | | | | | | |
| II 208-217 | ムーア命題の規範性と無根拠性 | | $\beta$ | $\beta'$ | | | |
| III 218-263 | 限界の内的表明とそれに対立する外的思考の実験的並置 | | $\beta$ | $\beta'$ | | $\delta$ | |
| IV 264-272 | ムーア知と客観的確実性 | | | | | $\delta$ | $\delta'$ |
| V 273-283 | 共同確実性と共同確実命題群 | | | | | | $\delta'$ |
| VI 284-299 | 認識論的自然権を持つ共同確実性としてのムーア知 | | | | | $\delta$ | $\delta'$ |

## ＜図２『確実性』第三部のサブシークェンス・スレッド図＞

| シークェンス | サブシークェンス | 各サブシークェンスを構成するスレッド | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | ムーア解釈 | 限界 | 限界の無根拠性 | 限界の起源 | 知識 | 確実性 |
| | | $\alpha$ | $\beta$ | $\beta'$ | $\beta''$ | $\delta$ | $\delta'$ |
| I 確実性・真理諸概念の言語ゲーム内性 | a（193-200）　確実性・真理諸概念の言語ゲーム内性 | | | $\beta'$ | | | $\delta'$ |
| | b（201-202）　ムーア確実性に対する権利という概念 | $\alpha$ | | | | | |
| | a′（203-206）確実性・真理諸概念の言語ゲーム内性 | | | $\beta'$ | | | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | ＜標本＞ 207 | | | | | |
| II ムーア命題の規範性・無根拠性 | a (208-213) ムーア命題の規範性と無根拠性 | β | β′ | | | |
| | a′ (214-217) ムーア命題の無根拠性・相対性 | | β′ | | | |
| III 限界の内的表明とそれに対立する外的諸思考の実験的並置 | a (218-222) ムーア確実性の内的表明 | | | | δ | |
| | b (223-228) 限界の内的突破の試み | | β′ | | | |
| | c (229-230) 正当化ゲーム的知識観 | | | | δ | |
| | a' (231-235) ムーア命題の限界性と世界像性の内的表出 | β | | | | |
| | d (236-242) ムーア命題の有意味さの検討 | β | | | | |
| | c' (243-245) 正当化ゲーム的知識観 | | | | δ | |
| | e (246-254) 限界としてのムーア命題の諸性質 | β | | | | |
| | f (255-256) 疑いの言語ゲーム内性とムーア命題の言語ゲーム規定性 | | β′ | | | |
| | g (257-263) 以上の対立する諸思考の集約的投射 | β | β′ | β′′ | δ | |
| IV ムーア知と客観的確実性 | a (264-266) ムーア知受容の試みと「有力な証拠」 | | | | δ | |
| | ＜標本＞267 ＜準標本＞268 | | | | | |
| | a'(269-272)「有力な証拠」と客観的確実性 | | | | | δ′ |
| V 共同確実性と共同確実 | a (273-276) 一般経験確実命題の経験的根拠の共同性 | | | | | δ′ |
| | ＜標本＞ 277 278 | | | | | |

| 命題群 | a'(279-283) 一般経験確実命題の経験的根拠の共同性 | | | $\beta''$ | | $\delta'$ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| VI 認識論的自然権を持つ共同確実性としてのムーア知 | a (284-285) 人類の非表明的な共同確実性の自然誌 | | | | | $\delta'$ |
| | b (286-290) 認識論的自然権を持つ共同確実性としてのムーア知 | | | | $\delta$ | $\delta'$ |
| | c (291-293) ムーア知の体系としての確固性 | | $\beta$ | | $\delta$ | $\delta'$ |
| | b' (294-299) 認識論的自然権を持つ共同確実性としてのムーア知 | | | | $\delta$ | $\delta'$ |

## 2　『確実性』第三部の四つの謎

これらの図と第三部のテキストから幾つかの謎が浮かび上がってくる。とりわけ以下の四つは重要である。それらは分析が解明すべき課題と考察をそこから始めなければならない出発点を同時に設定するものである。

第一の問題はシークェンスIII(§§218-263)が46小節長という異例の長さを持つことである。

『確実性』においてかくも長大なシークェンスは他に存在しない。何故このようなシークェンスがここに存在するのかという問いに答えることなくして『確実性』第三部の思考運動を理解することはできない。長大なシークェンスが存在するということはウィトゲンシュタインの思考が明確な区切りを持たず長い間持続したこと、そして相互の関係が不明瞭な小さな思考のまとまりが幾つも連続した事を意味する。この現象は図2においてシークェンスIIIを構成しているサブシークェンスの複雑な連なりからも読み取れる。こうした現象はウィトゲンシュタインの通常の思考秩序からはみ出す新しい運動をそこに読み取ることを我々に要求するだろう。

第二の問題は第一部、第二部で頻出していた「ムーア」への言及が第三部で激減するということである[3]。この現象は図1，2にスレッド$\alpha$<ムーア解釈>がほとんど姿を見せないという形で現れている。第三部の思考は専らスレッド$\beta$<限界>とスレッド$\delta$<知識>とそれらから派生するスレッドによって生成されて

いるのである。第三部の思考は、第一部、第二部とは対照的に、「ムーア解釈」という主題から離れた思考領域において展開されているのである。『確実性』全体を解読しようとする場合我々はこれが何を意味するのか答えなければならない。本論では次のような予想をもって臨みたい。『確実性』の思考の本性からして「ムーア解釈」という主題そのものが意味を失うというのはおよそ考えられらない。それゆえ第三部からこの主題が姿を消すのは第三部の思考を展開するためにこの主題を巡る新たな思考は最早必要でなかったからだ、と考えられる。すなわち第三部で意図された思考にとっては、「ムーア解釈」という問いに対する満足な答えがすでに第一部と第二部の思考によって与えられていたのである。これまでのムーア解釈を通じて見出された主題に関するウィトゲンシュタイン自身の最終的見解に到達する事が第三部の目的であったと考えられるのである。それゆえ第三部の結論部において知識と限界に関するウィトゲンシュタイン自身のの確固とした見解が出現すると予想できるだろう。

第三の問題は、第三部で二つの対立する知識観が示されれいることある。図1，2から判るようにスレッドδが構成する「知識」という思考領域は第三部の思考にとって大きな意味持っているが、そこでウィトゲンシュタインの思考が取りうる方向には「ムーア知否定的知識観」と「ムーア知肯定的知識観」の二つがある。前者は「私は・・・と知っている」という表現のムーア命題への適用を不適切とみなす知識観である。それは「私は・・・であると知っている」という表現を、話者がそうであるという根拠を示しうる場合にのみ妥当だと考えるものであり、正当化ゲーム的知識観とも呼ぶべきものである。他方ムーア知肯定的知識観とは「私は・・・であると知っている」という表現のムーア命題への適用を肯定し、ムーア知の知識としての存在を是認する知識観である。図2は第三部でIIIcとIIIc′においてムーア知否定的知識観が、IVとVIbでムーア知肯定的知識観が表明されていることを示している。このように『確実性』第三部には「知識」を巡って相反する二つの見解が示されているのである。この対立は例えば次の様なテキストの間に見出される。§245はムーア知否定的知識観を、§288はムーア知肯定的知識観を示している。

---

[3] ムーアへの言及回数は、第一部5回、第二部15回、第三部3回である。この問題についてより詳しくは拙稿「『確実性について』の主題と構造（中)」、『言語文化論集』vol.47：53－96,1998,pp.64－72を参照されたい。

・・・もし私が「自分には手があるのを私は知っている」と言い、それが単に私の主観的確実性の表明でないのなら、私は自分が正しいと自分で納得できるのでなければならない。しかしこれは不可能である。何故なら私に手があるということは私が自分の手を見たからといってそれ以前より確かになるわけではないからである。・・・（§245）

私は地球が自分の生まれるはるか以前から存在していたことを知っているのみならず、地球が球体であり、それは確立されているということ、私や他の人間に多くの先祖があること、これらのこと全てについて書物が存在しそれらは間違っていないこと、等をも知っている。・・・（§288）

『確実性』第三部を解読しようとすれば、こうした対立がウィトゲンシュタインによってどのように把握され、解消されたのかを解明しなければならない。

第四の問題は第三部における内的視点の出現である。内的視点と外的視点は人が限界について語る際に取りうる二つの相異なる態度である[4]。「内的視点」、「外的視点」という言葉自身ははそれらの態度を空間的比喩により表現しようとするものであるが、我々の分析においてこれらの表現を用いるためには空間的比喩に頼ることなく定義しなければならない。何故なら内外という空間的比喩はあくまでも我々解釈者がウィトゲンシュタインの態度を区別するために用いるものであり、その態度表明においてウィトゲンシュタイン自身が使用するものではないからである。ウィトゲンシュタイン自身がそれらの態度を取りわけるにおいて用いているのは「内」、「外」といった空間的比喩ではなく、人称の異なる使用法である。

すなわち「内的視点」とはある特別な人称がある仕方で使用された時にのみ出現する態度であり、「外的視点」とはそれ以外の場合にデフォールトとして存在している態度である。より具体的には「内的視点」はウィトゲンシュタイン（そして話者一般）が「私」や「我々」という一人称表現を自分自身に対して特定の仕方で用いる時に出現する態度であり、「外的視点」とは話者が一人称表現をそれ以外の仕方で用いたり、一人称以外の人称表現や非人称表現を用いる時に存在する態度である。これら二つの態度の交替を支配する一人称の二つの使用法が対象化的使用と非対象化的使用である。一人称の対象化的使用とは話者が自己を対象

[4] これら二つの態度に関する以下の考察は同 pp.72－92 での論考に基いている。

化し記述するために一人称表現を用いる使用法であり、一人称の非対象化的使用とは話者ががそれによって発語内行為を遂行したり限界を限界として認めるという態度を表明するために用いる使用法である。内的視点と我々が呼ぶ態度とは、話者が一人称表現を非対象化的に、しかも（約束するとか宣言するといった）規約化された発語内行為を遂行するためでなく、自己の限界（＝規範）を限界として認めてそれを生きるために用いる時に出現する態度なのである。それゆえテキストに出現する一人称を解読するに当たって我々は、対象化的使用、発話内行為遂行の為の非対象化的使用、限界表明の為の非対象化的使用、の三つを区別しなければならない。ウィトゲンシュタイン自身による一人称のこれら三種の使用例を次に示そう。下線部が当の使用である。

対象化的使用（使用者ウィトゲンシュタインは外的視点を取っている）
私はニューヨークと電話で話す。私の友人は彼の植木に蕾が付いたと知らせる。
そして私は植木には蕾が付いた・・・と確信する。・・・（§208）

発語内行為遂行の為の非対象化的使用（使用者ウィトゲンシュタインは『確実性』というテキストの製作者として製作方針を宣言しており、それは外的視点でも内的視点でもない）
それゆえ我々は我々を前へ進めない命題を排除するのだ。（§33）

限界表明の為の非対象化的使用（使用者ウィトゲンシュタインは内的視点を取っている）
私は一瞬たりとも自分がかつて成層圏に行ったことがあると信じられるか。否である。・・・（§218）

外的視点とは話者が（自分自身を含めた）様々な事物を対象化し記述するために言葉を用いる際に取っている態度であり、内的視点とは話者が自己の限界（＝規範）を自らがそれを超えることのできない限界として認め、そのことによって限界として有らしめ、そうした限界の中で生きることを「私」や「我々」という表現の使用において表明し、同時に表明することにおいて限界を生きることを実践する時出現し前提されている態度である。内的視点と外的視点は現にある個人によって取られている態度であり、言語表現のいかなる一般的意味にも還元できな

い。上に引用した§218でウィトゲンシュタインがの「私」の代わりに「L.ウィトゲンシュタイン」を使用したとしても§218全体の意味は変わらないが、発話者ウィトゲンシュタインがそこで取っている態度は全く違ったものとなる。同一の意味に二つの違った態度が宿りうるのであり、そうした態度は態度を取ること以外の何もにも還元できないのである。『確実性』において内的視点は第三部に至って初めて出現する。何故第三部において内的視点が初めて出現するのか、何故ウィトゲンシュタインは第一部、第二部と第三部で違った態度を取るのか、これが第四の問題である。

## 3　対立する思考を巡るウィトゲンシュタイン独特の思考様式について

以上四つの問いの三つまでが『確実性』第三部を巡る何らかの対立あるいは対比に係わっている。すなわち第二の問いは「ムーアの言明の解釈」という主題の出現と消滅という対比に係わるものであり、第三と第四の問いは外的視点と内的視点の対立とムーア知否定的知識観とムーア知肯定的知識観の対立に係わるものであった。我々が第三部のウィトゲンシュタインの思考を解明しようとするなら、こうした対立の源泉が何であり、それが第三部の思考全体とどのように関係するのかを明らかにしなければならないが、そのためにはウィトゲンシュタインの思考において思考の対立がどのような役割を果たしているか、ウィトゲンシュタインは思考の対立をどのように用いながら自らの思考を生成・展開させてゆく思考者なのかという問いに答えざるをえないのである。前稿[5]で我々が「思考の極性」と「思考系」という概念を通じて行った考察は、まさにこの問いに答えようとする試みであった。それに基き改めて思考の極性と思考系という概念を説明し、ウィトゲンシュタインの思考運動において対立的思考がいなかる働きをしているのかを明らかにしたい。

ウィトゲンシュタインの思考の一つの特徴的な在り方は、各々の思考の糸（スレッド）が形成する思考領域においてできる限り幅の広い異なった思考を探りながら表現しようとする発散的衝動であり、第一部、第二部において広く観察されたものである[6]。この衝動に従い、ある思考領域で相対立する思考を探ろうとする時ウィトゲンシュタインは、先ずある思考を提示し、次いでそれを否定するこ

---

[5] 拙稿「『確実陸について』におけるウィトゲンシュタインの思考(1)」pp.95－101を参照されたい。
[6] 同pp.114－115.

とにより新たな思考を提示するという否定媒介的な方法を用いない。彼が用いるのは相反する傾向を持ちながらも非両立的ではない思考を網羅的に横断してゆくという独特の思考様式であり、それを説明するのが思考の極性という概念なのである。

一般にある思考領域には互いに最もかけ離れ鋭く対立する一対の思考が存在すると考えれられる。ある思考領域におけるこうした一対の思考がその思考領域の二つの極である。例えば「限界の無根拠性」という思考領域には、「すべての規範体系は無根拠であり、それらは等価であり、いかなる意味においても一方が他方より正しいということはない」という思考（我々は前稿でこれを体系の論理[7]と名付けた）と、「すべての規範体系は無根拠であるが、我々の体系は正しく他の（者達の）体系は誤っている」という思考（我々はこれを実践の論理と名付けた）が存在する。それらは相矛盾し両立し得ない思考であり、この思考領域においてそれ以上に相隔たった思考の対は存在しない。すわちこれらは限界の無根拠性という思考領域の思考の両極なのである。これらを単に矛盾する二つの思考としてでなく、ある思考領域における二つの極として捉えるとは、この思考領域がこれら二つの思考によって画界され、それらの間に「限界の無根拠性」という主題を巡る無際限に多様で相異なる思考が存在するという前提の下でそれらを理解するということである。このように言えば、本当にそれらの間に無際限に多様な思考が存在するのかという疑問が持ち上がるかもしれない。しかしこの疑問は思考というものが「・・・である」という肯定的叙述と「・・・でない」という否定的叙述によってのみ表現されうるものであるという誤った前提から生じるものである。この前提に基づけば「明日の降雨の可能性」という主題に関して「明日雨が降る」という肯定的思考と「明日雨は降らない」という否定的思考しか存在しない。しかし現実に我々がこの主題について表明しうる（そして日々表明している）思考は、「明日雨が降ると思う」、「多分雨は明日降らない」、「天気予報は明日雨が降ると言っている」、「明日雨が降るだって！」、「今ごろ雨なんか降らないよ」、（「明日雨が降る」という発話に対して）「本当に明日雨が降るのかな」・・・と無際限であり、しかもその多様性は主観的確率の大小といった単一の尺度に還元できないものである。二つの思考の極の間に存在するこれらの思考の間には、主題的であるが狭義の意味では論理的でない多様な関係が存在する。すなわち、

---

[7] 体系の論理と実践の論理という概念が用いられたいきさつについては同 pp.82－88 を参照されたい。

それらは必ずしも「矛盾する」、「含意される」といった狭義の論理的関係によって結ばれているのではないが、単に無関係で相互に独立した思考でもない。それらは「明日の降雨の可能性」という同一の主題を巡る様々な思考として多様な思考関係で結ばれているのである。思考の極性もこうした諸関係の一つに他ならない。それはある主題を巡る思考が（その思考領域の）二つの極のどちらにより近いかを表すものである。例えば「本当に明日雨が降るのかなー」という発話において話者が実現し表明している思考は一方で明日の天気に対する確言を避けるものであり、同時に「明日雨が降る」という肯定的思考に疑問を表明する思考であり、「明日雨は降らない」という否定的思考と同じ極性を持つ思考だということができる。同じ思考領域において等しい極性を持つ二つの思考の間には、それらの極性の大小、すなわちどちらがより極に近いかという関係が存在する場合もあれば、こうした比較ができない場合もある。我々が上述の諸問題を取り上げる際「思考の対立」と呼んだものは、思考と思考の間の「同一主題に関して異なる極性を持つ」という関係に他ならないのである。

もし我々が思考は肯定的叙述と否定的叙述によってのみ表現されるという誤った前提に囚われるなら、ウィトゲンシュタインのテキストは一方で同一の思考を何度も反復する退屈なものに、他方で予期し得ない飛躍を孕んだ創造的なものに映らざるをえないだろう。こうした理解は同一主題に関してできる限り多様な思考を探査しようとするウィトゲンシュタインの思考の根本様式とそれに基く思考過程を無視したものと言わざるをえない。

思考の極性に基づくこうした思考様式と密接に関連してウィトゲンシュタインにはもう一つ独特の思考様式が存在する。それを説明するのが思考系という概念である。思考の極性は一つの思考領域における多様な思考の共存を説明するものであったが、『確実性』におけるウィトゲンシュタインの複雑な思考様式をこれだけで説明することはできない。何故なら思考は同時に複数の思考領域に跨って展開されるからである。『確実性』で様々な思考領域は先ず互いに独立なものとして登場し、それぞれにおいて思考は独立なものとして展開される。他方で『確実性』は単一の主題を巡る一体の思考であり、特定の「結論」に向かって運動していると考えられる。こうした事が可能であるためには相互に独立なものとして開始されたこれら複数の思考の流れがが何らかの形で互いに関係付けられ結び合わされなければならない。その結合様式の解明はウィトゲンシュタインのテキスト解釈の最大の問題であるとさえいえる。この問題に対して我々はこれまでにスレッドの融合という一つの解決案を示した[8]。しかしスレッドの融合という思考

領域の結合様式は、複数の思考領域がより大きな領域の下位領域であることが自明であるという局面においてのみ用いられるものである。二つの領域が互いに独立である場合には他の結合様式が必要なのであり、そうした結合様式がが存在するはずなのである。こうした思考の結合様式をを説明するのが思考系という概念である。この結合様式は異なる思考領域の極性同士を関係付けることによりそれらを結合しようとするものである。その際異なる思考領域の極性同士は思考の親和性と呼ぶべき関係によって結合される。この思考の親和性は論理的含意関係ではなく、相互に誘発したり要請するような思考間に存在する曖昧な関係の総体である。複数の思考領域を横断して親和性を持つ極同士を結合してゆくなら、そこには二つの対立する思考の連鎖が現れるだろう。思考系とはこれらの連鎖である。『確実性』第三部までに登場するスレッド（とそれに対応する思考領域）に関していえば、β＜限界＞、β'＜限界の無根拠性＞、δ＜知識＞という三つの思考領域が思考の極性間の親和性によって結合可能である。すなわちこれらの思考領域にはそれぞれ＜内的視点－外的視点＞、＜実践の論理－体系の論理＞、＜ムーア知肯定的知識観－ムーア知否定的知識観＞という極性対が存在するが、第一の極同士の間と第二の極同士の間にそれぞれ親和性が存在するのである。内的視点に立つ思考者には実践の論理とムーア知肯定的知識観を取るような思考の誘引力（それは論理的含意関係ではない）が働き、他方外的視点に立つ思考者には体系の論理とムーア知否定的知識観を取るような誘引力が働くのである。この極性間の親和性によって三つの思考領域の諸思考はは二つの思考系へと統合されるのであり、『確実性』全体の収束期である第三部のウィトゲンシュタインの思考運動はこの統合関係を利用しながら進行してゆくのである。これら二つの思考系のうち、第一の極の連鎖を内的思考系、第二の極の連鎖を外的思考系と呼びたい。それらの構成は図３のようになる。

**＜図３『確実性』第一部から第三部までに見られる二つの思考系＞**

| 思考領域（スレッド） | 第一の思考極性 | 第二の思考極性 |
|---|---|---|
| ムーア解釈（α） | 公的解釈 | 公的解釈 |
| 限界（β） | 内的視点 | 外的視点 |
| 限界の無根拠性（β'） | 実践の論理 | 体系の論理 |
| 知識（δ） | ムーア知肯定的知識観 | ムーア知否定的知識観 |
| 以上の思考領域を横断的に結合する二つの思考系 | ↓<br>内的思考系 | ↓<br>外的思考系 |

[8] 拙稿「『確実性について』の主題と構造（下）」『言語文化論集』vol.48：23－54,1998, pp.52－53.

この表においてスレッド$\alpha$＜ムーア解釈＞の二つの思考極性はいずれも「公的解釈」となっているが、これは内的思考系と外的思考系のいずれもがムーア言明の公的解釈を前提としていることを意味している。それゆえ内的思考系－外的思考系という対によって結合されるのは$\beta$、$\beta'$、$\delta$、の三つのスレッド（とそれに対応する思考領域）のみであり、$\alpha$はこの結合関係に対しては中立なのである。このことはもし今後ムーア解釈という思考領域において公的解釈と私的解釈の対立が考察の対象になるようなことがあれば、ここで成立している二つの思考系関係は、その根本前提が失われることによって大きく変動することが予想される事を意味している。ただしこうした事が現実となるのは『確実性』第四部においてであり、本論稿の直接の対象となるものではない。

## 4　『確実性』第三部の思考運動の特性とテキストの基本構造

多くの謎を孕み混乱した外観を呈している『確実性』第三部は上で述べた思考極性と思考系という概念を介して見直すなら、外的思考系から内的思考系への大規模な転換という明瞭な意義と形態を持った過程として姿を現す。第一部と第二部において本質的に外的思考系において運動していたウィトゲンシュタインの思考は、第三部の途中で内的思考系へと移行するのである。この移行は一つの見解から対立する見解への転換に他ならないのだが、ある思考領域における可能な思考の網羅的探索というウィトゲンシュタイン独特の思考様式から見れば同一主題を巡る一連の思考運動がその内的原理に従って展開し尽くしてゆく過程でもある。この意味で第三部の思考とその到達点は（外的思考系から内的思考系への移行という断絶を内包するにもかかわらず）第一部、第二部の思考と連続しており「限界」という主題を共有する同一の思考運動の一部をなしているのであり、しかもその「結論」という戦略的意味を持っているのである。

第三部の思考がこうした戦略的な意味を持つのはそこで「移行」という特別の思考過程が生起しているからに他ならないが、第三部のテキストはこの「移行」という過程に対応した独特の構造を持っている。それは第一部、第二部の構造と比較することにより明瞭となる。第一部と第二部は＜提示部＞－＜展開部＞－＜収束部＞－＜後収束部＞の四つの部分からなるという共通の構造を持っていたが[9]、これは「発散－収束」という思考過程に対応したものである。すなわち第

[9] 第一部と第二部の共通の構造については拙稿「『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(1)」、pp.114－118を参照されたい。

一部と第二部においてウィトゲンシュタインの思考が目指していたのは、先ず相互に緩やかに関連する幾つかの主題についてできる限り多面的に思考を展開し、その後それらをできるだけ一つの思考系へと統合しとようとすることであり、上記の四部構造はこの過程の軌跡である。それに対し第三部はそれらの主題に関して思考を更に拡張するのではなく、第二部の思考が到達した外的思考系から様々な試行と検証をを重ねながら緩やかに対立する内的思考系へと移行し、そのことにより限界という主題に関する包括的かつ最終的思考に到達することを目指している。ある思考系から対立する思考系へのこうした緩やかな移行が可能なのは、既に述べたように思考系の対立の根底にある思考極性の対立関係が相互矛盾ではなく、より間接的なものであるからである。そのため同一の思考の場において(同一のシークェンスにおいて) 相反する極性を持つ思考が共存可能なのであり、そうした共存の時期に思考の振幅が試されながら、大局的にはある思考系から他の思考系への移行が徐々に進行してゆくのである。こうした思考過程の軌跡として第三部のテキストを見るならそこには＜外的思考系優越期＞－＜移行期＞－＜内的思考系優越期＞という構造が見出せるであろう。具体的にはシークェンスI, IIが外的思考系優越期を、シークェンスIIIが移行期を、シークェンスIV, V, VIが内的思考系優越期を構成する。

## 5 『確実性』第一部の第二部の思考の要約

このように『確実性』第一部から第二部へと続いてきた思考運動は第三部の中途で大きく転換する。この過程を正確にたどるための準備として、第三部の思考の分析に移る前に第一部と第二部の思考過程を簡単に振り返っておこう。

『確実性』第一部(§§1-65)は思考運動が今後展開されてゆく思考領域 (主題) が形成される過程であった。これを「主題が提示される」過程でなく「主題が形成される」過程と呼ぶのは、第一部開始部において既に確固とした主題が提示されたのでなく、「ムーアの問題」を巡りゆるやかに相互に結ばれた多数の思考の契機が先ず提示され、それらを複数の起点として思考が何流にも展開され、その中で徐々にその後の思考運動を支配する思考領域が姿を現して来たからである。思考運動のかかる独特の始り方はとりわけ第一部シークェンスI(§§1-9)に顕著に示されている。それらの諸契機から最終的に「ムーア解釈」(スレッド$\alpha$)、「限界」(スレッド$\beta$)、「観念論批判」(スレッド$\gamma$)、「知識」(スレッド$\delta$) という四つの思考領域とそれに対応するスレッドが形成され、第一部の思考はこれら四つの領域において展開された。ただし『確実性』の思考運動にとって四つの思

考領域は同じ比重を持ってはおらず、第一部の思考は次第に「限界」という思考領域に収斂して行き、最終的に「誤りと疑いの論理的限界としてのムーア命題」という主題を構成することで終了したのである。この過程で「観念論批判」という主題は完全に思考過程から脱落し、「ムーア解釈」、「知識」という主題は「誤りと疑いの論理的限界としてのムーア命題」という主題が構成されるために必要な限りにおいて展開された。このように事後的かつ大局的に見るなら『確実性』第一部は「限界」という中心思考領域が「誤りと疑いの論理的限界としてのムーア命題」という主題を核として形成される過程であり、同時に「限界」という中心思考領域と様々な係わりを持つ副思考領域として「ムーア解釈」と「知識」という二主題が姿を現す過程であるとみなすことができる。こうした過程が最終的に完結するのがシークェンスIX(§§51-60)である。このように第一部は『確実性』の思考運動が展開される思考領域が確定される時期であり、思考の極性の明瞭な分化は未だ見られない。

こうして形成された「誤りと疑いの限界としてのムーア命題」という思考領域においてウィトゲンシュタインの思考が一つの方向へ徹底的に展開される過程が第二部(§§66-192)である。第二部の九つのシークェンスのうち八つにおいてウィトゲンシュタインの思考は「限界」とその派生主題を巡って展開されるのであるが、それらはすべて外的思考系という同じ極性を持って進行してゆく。残る一つのシークェンス（シークェンスVIII)では「知る」という主題を巡り思考は展開されるが、その思考も外的思考系という極性を帯びている。このように『確実性』第二部とは「限界」という主題に関して外的思考極性を帯びた思考が徹底的に探求された場であり、その意味で第二部全体が＜外的思考系優越期＞なのであり、第三部冒頭の2シークェンスの＜外的思考優越期＞は第二部の思考の延長に他ならないと言えるだろう。このように『確実性』第二部は外的思考系が圧倒的に支配する場であるが、その全てがこの思考系に収まるのではない。対立する極性を持つ思考を示すテキストが少数ではあるが第二部に存在している(§§112, 117, 155)[10]。それらは第二部で現に進行している外的思考系が事のすべてではないというウィトゲンシュタインの自覚の表出であると同時に、やがて第三部で生じるであろう思考の大規模な移行のかすかな予示とみなせるだろう。

---

[10] 外的思考系に収まりきれない思考を第二部で表現するこれらの少数のテキストに関しては同pp.118－126を参照されたい。

## 6 外的思考優越期の思考 －第三部シークェンスI, II－

我々の分析は先ず第三部冒頭の二シークェンスが<外的思考優越期>－<移行期>－<内的思考期優越期>という全体構造の中の外的思考優越期であることを示さなければならない。第三部シークェンスI,IIがこうした構造的位置を持っている事を示すとは、次の二つの事を明らかにすることに他ならない。第一にこれらのシークェンスが単に第二部の継続・延長ではなく第三部という独立した思考運動単位の固有の開始部であり、第三部全体に及ぶような主題提示の場であること。第二に構造的には三部固有の開始部であるこれらのシークェンスの思考が第二部以来の外的思考系に属し、そこで第二部の思考がウィトゲンシュタイン特有の形で反復されていること。以下これら二点を明らかにしながらシークェンスI, IIの分析を進めてゆきたい。

### 6.1 シークェンスI, IIが第三部固有の起点であること

第三部冒頭の二シークェンスが第二部の延長でなく新たな思考単位の起点であることは、第二部で見られなかった二つの新たな主題がそこで登場し、しかもそれらがこれら二シークェンスを超えて第三部全体をそのスコープとするグローバルなものであることから読み取れる。新しい主題とは「確実性 Gewißheit」と「権利 Recht」である。

**新たな主題としての「確実性」** 「確実性」という問題が『確実性』第三部冒頭部において改めて「新たな主題」として提示されるというのは奇異に響くかもしれない。というのもそれは『確実性』の主題そのものではないかと思われるからである。確かにウィトゲンシュタインはこれまでにも「確実性」ついて主題的に語ったことがある。それは第一部の§30においてである。しかしながら第三部シークェンスIでウィトゲンシュタインが「確実性」という主題に対して示している態度は§30でのものと根本的に相違しており、この新しい態度によって我々は「確実性」という主題が新たに登場すると判断できるのである。§30では次の様に語られていた。

> 確かだと確認した場合、人は「確かに計算は合っている」と言う。しかしこの人は自分の確実性(Gewißheit)という状態からそう結論したのではない。人は自分の確実性から事態がどうなのかを結論するのではない。
>
> 確実性とは、人が事態をそれによって確認する語調の様なものである。だが自分が正しいという事を人はこの語調から導くのではない。(§30)

ウィトゲンシュタインがここで「確実性」という主題に対して示しているのはそれについて思考を継続的に展開してゆこうという態度ではなく、それを問題としては解消し却下しようとする態度である。というのもこの小節の背後には「我々が認識や行為を遂行する際の心的状態は認識や行為の妥当性には関与しない随伴現象にすぎない」という思考が存在し、この思考が支配的である限り「確実性」は解消されるべき問題であり、探求されるべき主題ではないからである。第一部では支配的であったこの思考が第三部では姿を消し、ウィトゲンシュタインは「確実性」に対して次のように異なった態度を示すのである。

> ある命題の真理が確実(gewiß)であるとは何を意味するのか。(§193)

> 「確実な」という言葉によって我々は完全な確信、どのような疑いも無いことを表し、そしてそれによって他人を納得させようとする。これが主観的確実性である。だが何かが客観的に確実であるのはどのような場合なのか。－誤りがありえない場合にである。しかしそれはどのような種類の可能性なのか。誤りは論理的に排除されねばならないのではないか。(§194)

先ず§193は「確実である」ことを思考の主題とすることを宣言しており、第三部で「確実性」が新たな主題として取り上げられるであろうことを予期させる。そして第一部で「確実性」全般が主観的とみなされていたのに対し§194で主観的確実性と客観的確実性の区別が導入されているということは、ウィトゲンシュタインが最早「確実性」という主題を無条件に却下しようとしていないことを示している。『確実性』冒頭部§6で「奇妙で極めて重要な精神状態」と呼ばれた「確実性」という認知状態はこうして第三部シークェンスIで初めて肯定的に主題化され、スレッド$\delta$'(図1，2)として第三部の思考の流れ全体に関与してゆくのである。

**認識論的権利という新しい思考の要素**　シークェンスI, IIで登場するもう一つの主題は我々が「認識論的権利」と呼ぼうとするものである。この主題はウィトゲンシュタインが「権利 Recht」という言葉を一定の文脈で用いた時に非主題的に言及されるものであり、主題というよりは思考要素と呼ぶのがふさわしいであろう。それは一つのスレッドとして第三部の思考の流れを導くことはないが、第三部で生成される思考内容にとって決定的な意味を持つものである。

この思考要素は第三部シークェンスIサブシークェンスb(§§201-202)におい

て初めて非主題的にほのめかされる。Ib(§§201-202)というサブシークェンスはIa(§§193-200)とIa'(§§203-206)に挟まれたウィトゲンシュタインに典型的な思考の弱拍[11]であり、そこで示されている思考はそれが埋め込まれているシークェンスIの思考の主要な流れ(それはIaとIa'で展開されている「事実との一致としての真理概念のゲーム内性」を巡る思考である)と独立したものであり、それを最初に読んだ時には思考の突然の脱線としか認知できないにもかかわらず、後のシークェンス(VIb,VIb')において再び姿を現した時その先行的予示性が遡及的に認識されるものである。

> 誰かが「我々が現にそうしているように、記憶(あるいは感覚)を証拠として信頼するというのは本当に正しいことなのか」と問ったと考えよ。(§201)

> ムーアの命題のあるものはほとんど、我々にはそうした証拠を信頼する権利(ein Rechit)がある、と述べている。(§202)

続くシークェンスIIa(§§208-213)の§212でこの思考要素はより間接的な形で姿を現す。
すなわち「ムーア命題は経験に立脚していない」という主題を巡ってシークェンスIIの思考が展開されている途上で、そこで使用される修辞的反問において「権利」に次のように言及される。

> 例えば我々は一定の状況下である計算を十分に検算されたものとみなす。何が我々にそうする権利(ein Recht)を与えるのか。経験か。経験は我々を欺きうるのではないか。我々はどこかで正当化に終止符を打たなければならない。そしてそこで残るのは、我々はこのように計算する、という命題である。(§212)

これらのテキストにおいてウィトゲンシュタインは「権利」という言葉によって次のような問題に触れていると考えられる。「記憶」、「感覚」、「ムーア命題」、「計算」と呼ばれているのはすべて認識の「限界」、すなわち我々の実践の根底に

---

[11]「思考の弱拍」という概念についてより詳しくは同pp.81−82を参照されたい。

存しそれに対する誤りと疑いが「論理的に」排除されているものである。第二部を支配していた外的思考は限界に根拠はなく我々の実践の基礎そのものにも根拠はない、という考えから発していた。この思考を更に一歩進めるなら「それ自身根拠の無い物を他のすべての根拠として何故信頼できるのか」という問いが立てられだろう。限界に根拠の無いことは既に前提されているから、これは限界の根拠を問う問いではない。それは我々に信頼することを許すものを問う問いであり、「権利」とはそうしたものを名ざす一つの言葉だと考えられる。そうすれば§201の問いは、記憶や知覚を信頼する如何なる権利を我々は持っているのか、と表現できるだろう。ここで問われている特別な権利、すなわち通常の手段では根拠を与えることのできないものをすべての根底として信頼し受容する権利を認識論的権利と呼びたい。この概念を介して語るなら上述の実践の論理と体系の論理とは我々の認識論的権利を巡る二つの立場に他ならない。すなわち我々の認識論的権利を主張するのが実践の論理であり、それを否定するのが体系の論理なのである。これに対し上の§212では、認識論的権利の有無を巡る問いには答えず、ただ自らの実践を事実として示すという態度が示されている。それは上の二つのいずれとも異なるものであり、ここでは事実の論理[12]と呼びたい。

実践の論理、事実の論理、体系の論理、は限界の無根拠性という思考領域に広がる思考のスペクトラム上の三定点である。この時点でウィトゲンシュタインの思考は未だこのスペクトラム上で拡散しているが、第三部後半においてそれは一つの方向へと収斂してゆく。その際認識論的権利という思考要素が決定的な役割を果たすのである。

### 6.2 シークェンスI, IIの思考は未だ外的思考系に属すること

このように二つの主題が新たに姿を現すにもかかわらず第三部冒頭の二シークェンスで展開される思考は内容的に外的思考系に属している。以下各シークェンスの思考を順に追ったあと、それと第二部の思考の類似性をまとめて示したい。

**シークェンスIの思考**　サブシークェンスa冒頭の§193と§194において「確実性とは何か」という新たな問いが示され、「客観的に確実である」という事態が思考の課題として示される。しかしながら§194から§195へと思考が喚喩的に進行する結果、誤りの限界という旧来の主題へと思考は回帰してゆくのである。

---

[12] ウィトゲンシュタインの思考において事実の論理は長い歴史を持っているが、『確実性』に限定すれば以下のような箇所で見出される。§§47,212,219,232.

§196で誤りの限界は「確実な証拠」として捉えられ、その言語ゲーム上の役割が主題化される。続く§§197-200では限界としての「確実な証拠」が事実との一致や真理という真理諸概念に立脚するのでないことが強調され、サブシークェンスa'の思考が先行的に予示される。思考の弱拍であるサブシークェンスb(§§201-202)をはさんでサブシークェンスa'が続くが冒頭§203では「事実との一致」という真理概念が言語ゲームの内部においてのみ成り立つことが言明され(真理概念の言語ゲーム内性)、同時に『論理哲学論考』の名が挙げられ、そこでの「事実との一致」の批判がこの思考の背後にある事が示される。更に§204では真理概念を構成している言語ゲームの根底にあるのは何らかの真理認識ではなく行為であること(言語ゲームの行為立脚性)が、§205ではこうした言語ゲームの基礎には真、偽という概念は適用できないことが表明される。続く§206では、これまで展開されてきた真理概念の言語ゲーム性を巡る思考を受けてある種の結論的思考態度が表明される。それは、限界の根拠を訊ねる者には「根拠は与えられない、しかしもっと知ればわかるようになる」と答えよ、という思考態度である。この思考態度は他者一般に対して取りうるものではなく、自分たちの言語ゲームをこれから学ぼうとするもの、すなわち初学者にのみ取りうるものである。それは初学者に対して現実の限界を示しその無条件の受容を迫る思考であり、本質的に初学者に適用された事実の論理に他ならない。以上を総括するならシークェンスIの思考の展開は

限界の無根拠性を巡る思考------->事実の論理

という図式に要約できるが、これは第二部の思考の要約的反復に他ならない。

**シークェンスIIの思考** 思考の標本§207を隔てて§208からシークェンスIIが始る。形式的には新しい例が提示され新たな思考の区切りとしてのシークェンスIIが始められるが、展開される思考の内容はシークェンスIの直接的な継続である。少しわかりにくいかもしれないが§208の例のポイントは地球ムーア命題は何らかの経験によって根拠付けられるかという問いであり、同じ問いは§210aでも立てられる。この問いかけの背後にはムーア命題は形式的には経験的命題のようであるが、通常の経験的命題のように経験に立脚するのではなく特別な命題群として我々の考察と探究の原理として機能している、という思考が存在しているが、それは§§211,213で改めてほのめかされている。§§210b,211ではこれらムーア命題群が長い歴史の中で固定化したものであることが、§209はそれが

体系をなし信じることの出発点となることが述べられる。§212ではムーア命題群の諸性質に関する考察に続いて結論的な思考態度として事実の論理が表明される。§214から始るサブシークェンスa'は構造を欠いた思考のアルバム的テキストであるが、注目すべきは§217である。そこでは、「すべての計算は不確実でありどれも信頼できない」と主張する者を我々は狂っているとみなすが、この者が誤りであるといえるのか、我々と単に反応の仕方が違っているのではないか、という思考がほのめかされ、反語的に試みられているが、そこで試みられているのは自分の認識論的権利を放棄する思考、すなわち体系の論理そのものである。従ってシークェンスIIの思考の展開は

限界の諸性質に関する思考--＞事実の論理--＞体系の論理の試行

という図式によって要約できる。これもまた第二部の思考の要約的反復であり、上述のシークェンスIの思考から更に体系の論理の極限に向けて探索しようという試みである。

**シークェンスI,IIのテキストと第二部テキストの類似性**　このように第三部シークェンスI,IIの思考は全体として第二部の思考の反復であるが、そればかりでなくシークェンスI,IIのテキストは多くの点で第二部のテキストを反復してもいる。その結果これらのシークェンスを読む時我々は幾重にも及ぶ第二部への曖昧な回帰的参照により一種の思考の既視現象を体験するが、これはテキストと思考を反復しながら明瞭化してゆくウィトゲンシュタインの思考スタイルの産物である。以下に第三部シークェンスI,IIと第二部のテキストと思考の類似対応関係をを列挙する。とりわけ最初に示す対応テキストは高い類似性を示し第二部のテキストが第三部へと転写されたのではないかという疑いすら引き起こす。しかし両テキストを注意深く比較すれば、そこに存在する微妙な語の相違が、この類似性はおそらく想起に基づくものであると推測させるのである。

第三部シークェンスI, IIと第二部のテキストの類似

| 第三部シークェンスI, IIのテキスト | それに類似する第二部のテキスト |
|---|---|
| §203 | §§191,193 |
| §204 | §192 |

第三部シークェンスI，IIと第二部の内容的対応

| 内容項目 | 第三部シークェンスI，IIの箇所 | 第二部の箇所 |
|---|---|---|
| 真理概念の体系内性 | §§197-200，203 | §§189-192 |
| ムーア命題の固定性 | §§210b，211 | §§96-99 |
| ムーア命題の原理性 | §§211 | §§87-88 |
| 事実の論理 | §212 | §105 |
| 体系の論理（の試行） | §217 | §188 |

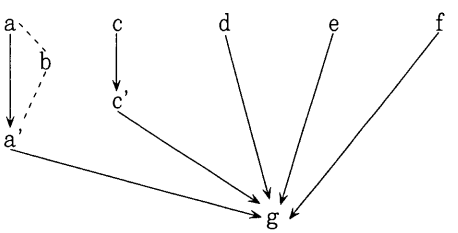
## 7 移行期の思考 －シークェンスIII－

### 7.1 第三部シークェンスIIIの構造的・内容的特異性

『確実性』第三部シークェンスIII(§§218-263)は構造と内容の両面で極めて特異なテキストであり、『確実性』の読者にとってこの特異性はウィトゲンシュタインの思考の方向性がこの場所に至って全く失われてしまうという事態として体験される。本節では先ずこの構造上の特異性を示した上で、どのような思考の運動がそうした構造を生み出し、それを通じて移行という思考過程がどのように進行しているのかをを明らかにしたい。

第三部シークェンスIIIの構造は以下の通りである。シークェンスIIIの特異さはこの図の複雑さからも十分に読み取れるが、それを『確実性』のシークェンスの構造分布の中に位置づけることにより、このシークェンスの特異さの意味がより明らかとなるであろう。

**＜図4 第三部シークェンスIIIの構造＞**




各サブシークェンスの内容と所属する思考系

a：ムーア命題の限界性の内的表出（内的思考系）

b：ムーア命題に対する疑いの表出の試み（外的思考系）

c：ムーア知否定的知識観（外的思考系）
d：ムーア命題（とその否定）の有意味性の検討（外的思考系）
e：限界としてのムーア命題の諸性質
f：疑いの言語ゲーム内性とムーア命題の言語ゲーム規定性（外的思考系）
g：以上の諸思考の集約的再現

『確実性』第一部－第三部には、第一部10、第二部9、第三部7,計26のシークェンスが存在するが、その構造は二種類に分けられる。第一は比較的少数の種類（多くの場合一種または二種、最大で四種）のサブシークェンスから成る構造で、シークェンスはそれらの反復という形をとり、サブシークェンスの継起[13]は,a-a',a-b-a',a-b-a'-b',といったリズミカルな形態を持つ。これらのシークェンス構造を通常構造と呼びたい。通常構造を形成するサブシークェンス種（a,b,c,といった文字で表現される小主題）は緩やかに結ばれており、それらが交互に現れることによりウィトゲンシュタインの思考はリズミカルに進行し、反復を通じて徐々に展開してゆく。従って通常構造を持つシークェンスの思考展開は相当程度予測可能であり、思考はどちらかといえば非創造的であり、それに応じてテキストの読解は容易である。第一部では9シークェンスが、第二部では8シークェンスが、第三部では6シークェンスが通常構造を持っている。大多数のシークェンスはこの構造を持っているのである。

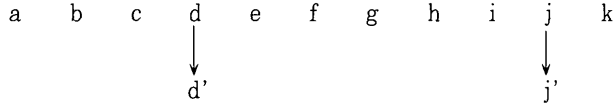
第二の構造は各部に一つづつという少数のシークェンスにのみ見られるものである。それは多数（五つ以上）のサブシークェンス種から成る複雑なものであるが、通常構造の場合に見られたような構造的類型は存在しない。それぞれのシークェンスが独自の複雑な構造を持っているのである。こうした構造を特異構造と呼びたい。特異構造を持つシークェンスにおいてウィトゲンシュタインの思考の運動は通常のリズミカルなものではなく、予測不可能で創造的となる。その結果それまでの思考運動には見られなかった新しい運動の方向や形態が生み出される。従って特異構造を持つシークェンスは思考の大局的な新しい流れを造るという戦略的創造的思考過程であると考えられる。具体的には、第一部シークェンスI、第二部シークェンスVII、第三部シークェンスIII、が特異構造を持っている。以

[13] 第三部のシークェンスとサブシークェンスについては本論<図2>を、第一部、第二部の各シークェンスとそのサブシークェンスについては、拙稿「『確実性について』の主題と構造（下）」pp.35－37、「『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(1)」pp.52－54、の『サブシークェンス・スレッド図』を参照されたい。

下これらのシークェンスの構造からそれぞれの戦略的意義を探ってみよう。

第一部シークェンスⅠの構造は次の通りである。

**＜図5 第一部シークェンスⅠの構造＞**




各サブシークェンス種の内容

a：ムーアによる観念論批判

b：ある事の証明不可能性

c：「皆にそう思われる」から「真である」の導出不可能性

d：疑いの限界

e：言語ゲームに所属する手続きとしての経験的テスト

f：ムーア言明の意味の不明確性

g：命題の誤りの可能性

h：ムーアの「私は・・・と知っている」の誤用

i：確実性という心的状態

j：生活における知識の在り方

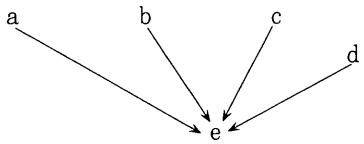
k：知識と確実性の区別

第一部シークェンスⅠの構造的特異性は極めて多くのサブシークェンス種が登場し、それらがほとんど反復されないということである。この特異構造は「相互に独立した多くの主題が展開されるのでなく提示される」という思考運動を表している。aからkの11のサブシークェンス種に対応する11の主題は内容上無関係ではなく「ムーアの問題」という大きな主題との係わりを介して相互に関連している。しかしシークェンスⅠにおいてそれらの間に思考運動上の動的関係は存在せず、その意味で相互に独立しているのである。こうした構造を持つ第一部シークェンスⅠの思考運動上の大局的意義とは、ムーアの問題を巡る思考運動を、関連するすべての下位主題を同時に提示することにより新たに開始することである。こうして開始された思考運動が『確実性』なのである。このように開始されることによりこの思考運動は同時並行的な複数の思考の流れとして来るべき統合と対

立を予感させつつ展開してゆく。この思考運動の在りかたは明らかにウィトゲンシュタインの思考の根本的生成様式と深く関わっている。こうした始りはある思考運動において一度しかありえないものであるから、このシークェンスはたまたま最初に置かれたテキストなのではなく、思考運動の起点という戦略的創造的意味を持っているのである。

第二部で唯一特異構造を持つシークェンス VII の構造は次の通りである。

**＜図 6　第二部シークェンス VII の構造＞**




各サブシークェンス種の内容

a：誤りと疑いの限界としてのムーア命題

b：根本的信念の受動的起源

c：根本的信念の無根拠性

d：以上の思考の融合の先行的予示

e：以上の思考の融合

このシークェンスはサブシークェンスeを幹とする樹状構造を持っている。前稿の分析[14]において示したようにこのシークェンスは第二部の結論部であり、第二部で展開された多くの思考要素をできる限り一つの思考系へと整合的に融合するという思考過程の場である。その融合の結果としてサブシークェンスeに示された思考は本質的に外的思考系に属するものである。上の図が示す樹状構造は第一部シークェンスIに見られた放射状構造と対を成すものであり、起点において発散した多くの主題は様々な経路を経て第二部シークェンス VII において相互に矛盾しないものだけが一つの系へとまとめられたのである。第二部シークェンス VII の持つこうした戦略的意義は「親和性を持つ諸思考の融合」と表現できよう。それに対し第三部シークェンス III は、そうした融合の結果生まれた一つの思考

[14] 拙稿「『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(1)」、pp.95－101.

系から、その融合から排除された別の思考系への移行という意義を持っていると考えられる。ここで再度図4で第三部シークェンスIIIの構造図を見てみよう。形態的にそれはサブシークェンスgを幹とする樹状構造を持っており、第二部シークェンスVIIと同様、諸思考要素の融合の場のようにも見える。しかしサブシークェンスgへと流入する諸思考は二つの相容れない思考系に属しており、決して融合しうるものではない。サブシークェンスgとは相容れない思考要素を一緒に並べる場、来るべき取捨選択を前提としてそれらを同一テーブルに並べる場であり、移行の前でも後でもない移行そのものが生起している場だと考えられる。以下その有り様を具体的な思考の流れに沿って見てゆきたい。

### 7.2 限界の内的表明を通じた内的思考系の出現 －IIIa, IIIb, IIIa'－

『確実性』の端緒より第三部シークェンスIIに至るまで、第二部における剰余の思考としてのわずかな痕跡を除けば存在すらしなかった内的思考系は第三部シークェンス冒頭のサブシークェンスaにおいて突然姿を現す。そこで内的思考系は思考内容が表明されることによってではなく、テキスト生成者ウィトゲンシュタインが自ら「私」を非対象化的に使用し、ムーア命題の限界性を内的に表明することによって出現する。『確実性』においてウィトゲンシュタインが限界について語る方法の変遷をたどりながら、この新たな思考の出現を跡付けてゆきたい。

ムーア命題はそれについて誤ったり、それを疑うことが通常考えられないという意味で我々にとって「限界」として存在している。『確実性』においてウィトゲンシュタインがムーア命題の限界性について語る語り方には、(1)そこで語られている限界の限界性に対してウィトゲンシュタイン自身が語る行為自身においてコミットしている場合、と(2)そうでない場合、の二種に分けられる。(1)が限界の内的表明、(2)が限界の外的記述である。ある語り手が限界について語る場合、それが内的表明となるか外的記述となるかは上の2.2で示したように人称表現、とりわけ一人称表現のの使用法に依存する。下の分類表に示されているようにこれまでウィトゲンシュタインが限界について語った語り方はA1とA2の二つであるが、それらはいずれも限界の外的記述であった。すなわちA1の§155や§222のように三人称を用いて限界について語られる時、語り手（ウィトゲンシュタイン）自身はその限界性へのコミットメントから身を引いており、語る行為が外的記述となるのは明瞭だが、A2でも同様のことがより複雑で微妙な手続きで遂行されているのである。§4や§247のような形で「私」が非対象化的に使用され限界について語られると、語り手「私」は限界の限界性を単に観察者として記述

するのでなく限界性に自らコミットしているかのようにみえる。しかしこの「私」は限界の限界性へのコミットメントを引き受ける最終的な言葉を注意深く回避している。§4の「私」は疑う根拠が無いと言いつつも、「自分には疑えない」という言葉を回避しコミットメントを単に暗示するのみであり、§247の「私」は「どうして私にはそれを疑うことが想像できないのか」という疑問形を用いることにより、「自分にはそれを疑うことは想像もできない」というコミットメントを前提化し、それによりその場でのコミットを回避している。こうした意味でこれらの「私」の使用は非対象化的でありながらも間接化されており、語り手は限界性へのコミットを暗示しつつもそれを回避しており、これらの言葉は限界の外的記述の一形態とみなされるのである。それに対してBに示されているように、ウィトゲンシュタインは第三部シークェンスIIIで初めて限界を内的に表明する。すなわちウィトゲンシュタインが§218や§222に見られるような仕方で非対象化的に「私」を用いる時、彼はムーア命題の限界性に自らコミットしながらムーア命題について語っているのである。このように、それまで一貫して限界を外的に記述してきたウィトゲンシュタインは第三部シークェンスIII冒頭§218において初めて限界を内的に表明し、それによって彼の思考は内的思考系へと移行し、内的思考はシークェンスIIIa, a'(§§218-222, 231-235)において更に展開されてゆくのである。

『確実性』でウィトゲンシュタインが限界について語る語り方の変遷

A 第三部シークェンスIII以前からのやり方

A1 非人称表現の使用による限界の外的記述

§155「一定の状況下で人は誤り得ない。」

§220「分別ある人間は一定の事を疑わない。」

A2「私」の非対象化的使用の間接化による限界の外的記述

§4「しかし「自分には脳がある事を私は知っている」といった命題はどうか。私はそれを疑うことができるか。私には疑う根拠が無い。」

§247「「私には手が二本ある」というのを疑うとはどういうことなのか。どうして私にはそれが全く想像できないのか。」

B 第三部シークェンスIIIで初めて登場するやり方

「私」の非対象化的使用による限界の内的表明

§218「自分は成層圏に行ったことがあると私は一瞬たりとも信じるこ

とができるか。否である。」

§222「自分が成層圏に行ったことがないというのを疑うのは私には不可能である。」

### 7.3 外的思考による内的思考の試験 －IIIc,IIId,IIIc',IIIe,IIIf－

第三部シークェンスIII冒頭における内的思考系の出現により、それまで時折感じられたにすぎない思考の緊張が一挙に顕在化する。§218や§222の限界表明における「できない」は「足が折れたので私は歩くことができない」の「できない」のように発話主体のある能力の欠如の記述として解釈することはできない。そこで発話主体としてウィトゲンシュタインは自己の懐疑的想像力の欠如を記述しているのでなく、自分がかつて地上を遥か離れて成層圏や月に行ったことはないことの事実性にコミットしているのであり、それを事実として主張することに対する認識論的権利を主張しているのであり、この事実を疑うことは自己の持つ根源的な認識論的権利を損なうものであることを表明しているのである。こうした限界表明と同一文脈で外的思考を、例えば§188に見られるような純化された形で表明することは認識主体としての内的矛盾を抱え込むことになる。にもかかわらず第二部以来積み重ねられてきた外的思考はなお背景的思考として存在しているのであり、§218や§222の限界表明によってウィトゲンシュタインの思考から一挙に消滅するわけではない。シークェンスIV以降ウィトゲンシュタインは内的思考を更に包括的に展開してゆくのだが、この最終的な思考過程はシークェンスIII冒頭の内的思考に直ちに続くのではない。内的思考が最終的に選択される前に、いわばその強度が試されるのであり、そのためにサブシークェンスc以降次々と外的思考が繰り出され、シークェンスIII全体は異なる思考系の衝突する思考の実験場の如きものとなるのである。ただそれらの外的思考はウィトゲンシュタイン特有の孤立した様式で提示され、内的思考との対立関係を示すテキスト上の外的指標はほとんど存在しない。そのためシークェンスIIIは「混乱したテキスト」という外見を呈するのであり、思考系という概念を介して見た時にのみその本当の姿を現すのである。

**ムーア知否定的知識観による内的思考の試験** －IIIc,IIId,IIIc'－　内的思考に対する第一の試練としてサブシークェンスc(§§229-230),c'(§§243-245)でムーア知否定的知識観が展開される。上で述べたようにこれらのテキスト自身にはそれがサブシークェンスaの内的思考に対して向けられていることを示すものは何も存在しない。それは知識や「私は・・・知っている」という表現に関する独立

した考察という外見を呈している。しかしそれらがサブシークェンスaの内的思考に対して批判的関係を持っていることはサブシークェンスaのテキストの内に示されている。これらがサブシークェンスaの内的思考に向けられていることはサブシークェンスaにおいて予示されていたのである。サブシークェンスaの§§218のテキストを見てみよう。

> 自分は成層圏に行ったことがあると私は一瞬たりとも信じることができるか。否である。それなら私は、ムーアのように、その反対だと知っているのか。(§218)

自分が成層圏に行ったことがないのは疑えない、という限界の内的表明に続く下線部においてウィトゲンシュタインは、新たに出現した内的思考とこれまで表明されてきたムーア知否定的知識観の対立を間接的かつ省略的に主題化している。上で述べたように限界を内的に表明する思考にとって限界について「私はそうであると知っている」と述べることは自然であり、「そうであると知っていると言うのは誤りである」と言うのは極めて不可解なことである。しかしウィトゲンシュタインがこれまで展開してきた「私は・・・知っている」の用法に関する考察(ムーア知否定的知識観)は、まさに限界に対してそう述べることを禁じてきたのである。従って上の限界の内的表明はそうした考察に対する間接的な挑戦なのであり、下線部はその挑戦に対してこれまでの考察を防衛しようとする言葉なのである。それは「L.Wよ、それならお前はこれまで自分がムーアの「私は・・・知っている」の用法に対して展開してきた言語ゲーム的批判を放棄するというのか」というウィトゲンシュタイン自身によるウィトゲンシュタインの批判なのである。ムーア知否定的知識観を改めて展開するサブシークェンスc,c'はこの批判の言葉の継続であり、今や過去のものとして放棄されるかもしれないムーア知否定的知識観をできる限り強力な形で再提示し、新しい思考の波の強度を試し、できることならそれを食い止めようとする試みなのである。

このようにサブシークェンスc,c'はムーア知否定的知識観の集大成という側面を持っているから、その思考内容をよりよく理解するためにウィトゲンシュタインがこれまで展開してきたムーア知否定的知識観とムーア批判的な思考を振り返って整理したい。ウィトゲンシュタインがこれまで展開してきたムーア批判的思考を、(1)ムーア言明の有意味さに対する疑念,(2)「私は知っている」の非表出性,(3)「私は知っている」の正当化ゲーム性、の三つに分類し、それぞれについて簡単

に説明しよう。

(1)の根底にあるのは「真偽のいずれにもなりうる命題のみが有意味であり、決して偽にはなり得ない命題は実は文法規則を表明しているにすぎず、命題としては無意味である」という特定の命題の有意味性への懐疑とも呼ぶべき思考である。ウィトゲンシュタインにあってこの思考はもともと「すべての棒には長さがある」や「私の痛みは私にしか感じることはできない」といった命題とその否定に適用され、それらの有意味性を問題視する際に登場したものである[15]。

ムーア知否定的知識観の要素としての(1)は古い起源を持つこの思考を改めて「私は自分に手が二本ある事を知っている」といったムーア言明に適用したものであると考えられる。それが『確実性』で最初に登場したのは§4である。

> 「私は自分が人間である事を知っている」この命題の意味がいかに不明確であるかを見るために、その否定について考えてみよ。・・・(§4)

第三部シークェンスIIIのサブシークェンスd(§§236-254)の思考も有意味性への懐疑的思考のムーア命題への適用であり、そこでは「地球は自分が生まれる前から存在していた」、「すべての人間には両親が存在する」といった命題がどのような意味で意味を持つのか、それらは形而上学的（従って無意味な）命題なのか、経験的科学的命題なのか、あるいは宗教的信念に類するものなのかといった事柄が探求されている。しかしながらこれはムーア知否定的知識観とは間接的に結びつくにすぎない。『確実性』でのムーア知否定的知識観の展開という流れの中で見れば(1)は古い思考の名残であり、その相対的比重は次第に低下し、下の表に示されているように第三部においては姿を消している。

(2)は、ムーアによる「私は自分に二本の手がある事を知っている」といった「私は知っている」の使用は、それが「痛い」と同様の主観的状態の表出であるという誤った考えに基いている、という批判である。『確実性』においてこの批判が最初に登場するのは§12であるが、最も早い明瞭な定式化は§21に見られる。

---

[15] この思考は『哲学的文法1』§83、『青色本』大修館全集版pp.89－94,103－105において明瞭な形で見出すことができる。『確実性』においてはムーアと観念論の論争を巡る考察（§§35－36）において登場するが、そこでは同時にこうした有意味性の基準を根拠とした批判の限界が示唆されている（§37)。

ムーアの見解とは実は次のことに帰着する。すなわち、「知る」という概念は「私は知っている」という言明が誤り得ない、という点において「信じる」、「推測する」、「疑う」、「確信する」といった概念と類似している。・・・(§21)

この批判は「知識」と「確実性」の差異と関係という問題と密接に関連し、今後の思考の展開に対して重大な係わりを持つものである。

(3)は、ある事を知っていると言えるのはそれに対する正当化を他人に対して示しうる場合である、という正当化ゲーム的知識観をムーア言明に批判的に適用したものである。従って正当化ゲーム的知識観が表明される時はこの批判が内包されているのであるが、これが最初に明示的に示されたのは§91においてである。

ムーアが「地球は・・・存在してた事を私は知っている」という時、我々のほとんどは地球が以前から存在していたことについて彼が正しいと認め、それを確信しているという彼の言葉を信じるだろう。しかし彼は自分の確信に正しい根拠を持っているのだろうか。というのも、もし根拠がなければ彼はそれを知らないことになるのだから。(§91)

この批判も第一部から第三部に至るまで提示され続けている。

これら三要素の第一部から第三部までの出現箇所をまとめると次のようになる

三つのムーア言明への批判的思考の系譜（数字は節番号）

| 批判の種類 | 第一部 | 第二部 | 第三部 |
|---|---|---|---|
| (1)無意味である | 4,10,41 | | |
| (2)知識を表出と誤解 | 12,13,2,42 | 178,179,180 | 230,245 |
| (3)正当化ゲームを逸脱 | 18 | 91 | 243,250<br>253 |

**第二部の外的諸思考の反復** -IIIe,IIIf-　続くサブシークェンスe,fで第二部および第三部シークェンスI,IIで展開された外的諸思考が反復・拡張され、内的思考に対する試験が重ねられる。

サブシークェンスe(§246-254)では「私には手が二本ある」という手ムーア命題を共通の素材としながら、外的思考系に属する多くの思考要素が再提示される。

それらは限界としてのムーア命題の諸性質を巡る思考とそれを前提とした態度表明としての事実の論理であり、全体として示されている思考はシークェンスI,IIで見たものと同形である。続くサブシークェンスf(§§255-256)では話の流れが改まり、「疑い」という行為の意味が言語ゲームによって規定され、一定の言語ゲーム内部でのみ疑いが疑いとして存在すること（疑いの言語ゲーム内性）、そうした言語ゲームの同一性がムーア命題によって規定されていること（ムーア命題の言語ゲーム規定性）、他方ムーア命題は不変ではなく言語ゲームが変化するにつれ変化しうること（言語ゲームの変化）、が述べられる。これらの思考要素とその出現箇所を整理すると次のようになる。

IIIe、IIIfで提示される外的な思考要素（数字は節番号）

| | 節番号 | 思考要素 | この思考要素のこれまでの出現箇所 |
|---|---|---|---|
| IIIe | 246 | ムーア命題の根底性 | 167 |
| | 247 | ムーア命題の不可疑性 | 4,218　その他多数 |
| | 247,248 | ムーア命題の体系性 | 102,105,225 |
| | 250,253 | ムーア命題の根拠付け不可能性 | 89　その他多数 |
| | 251 | ムーア命題の行為立脚性 | 7,110,196,204 |
| | 252 | ムーア命題の限界性の普遍性 | 19,219,220 |
| | 254 | 事実の論理 | 105,212,219,232 |
| IIIf | 255 | 疑いの言語ゲーム内性 | 203 |
| | 255 | ムーア命題の言語ゲーム規定性 | 56,63 cf.155 |
| | 256 | 言語ゲームの変化 | 63,65,96,97,98 |

この中のムーア命題の限界性の普遍性という思考要素について説明しておきたい。ムーア言明は「私は・・・であると知っている」や「私は・・・を疑えない」という形をとる。

§218のようにウィトゲンシュタインがムーア命題の限界性を表明する時、彼自身がこの表現の「私」となってムーア知の存在やムーア命題の限界性を表明することになる。その場合そこで表明されているのはウィトゲンシュタインという一個人の限界性なのか、それともたまたまウィトゲンシュタインという「私」によって代表されている人々に共通の限界性なのかという問題が存在する。もし後者であるならその人々とはウィトゲンシュタインによって「我々」として表現されるべき人々であるから、問題はムーア言明によって表明されている限界が「私」

の限界なのか「我々」の限界なのか、ということでもある。この点についてこれまでウィトゲンシュタインは主題的にはなにも語って来なかったが、表明されているのは我々の限界であるという立場に彼が立ってきたことは「分別のある vernünftig」という言葉の次の様な使用によって非主題的に示されてきたのである。

> 「ここに手がある事を私は知っている」という言明は「何故なら私が見ているのは自分の手だから」と続けられよう。そうすれば分別ある人間は私が知っていることを疑わないだろう。(§19)

> 分別ある人間としての私にとってそれについていかなる疑いもありえない。(§219)

それに対し IIIe§252 では次のように同じ事が初めて主題的に主張されているのである。

> しかし自分に手が二本ある事を私がこのように信じていると言うだけではない。すべての分別ある人間もまたそう信じているのである。(§252)

限界の普遍性という思考要素はこうして第三部において思考運動の背景から焦点へと移動するのであり、その結果として第三部の後半で結論的思考が生成される際に決定的な役割を果たすのである。

### 7.4　内的思考系と外的思考系の並列的提示　－IIIg－

以上のようにシークェンス III のサブシークェンス a から f まで、内的思考系と外的思考系という対立する極性を持つ諸思考が並置され衝突させられるが、それらは対立するまま最終的にサブシークェンス g(§§257-263)へと次のように投射される。

IIIg に投射される諸思考一覧

| 思考極性 | 節番号 | 思考要素 | 投射源サブシークェンス |
|---|---|---|---|
| 内的思考 | 257,261 | ムーア確実性の内的表出 | a,a' |
| 外的思考 | 258,259 | ムーア命題の意味の考察 | d |
| 外的思考 | 257,262 | 異なる世界像体系の相互他者性 | なし |
| 外的思考 | 260 | ムーア知否定的知識観 | c,c' |
| 外的思考 | 263 | 信念の受動的起源 | なし |

シークェンス III における思考の投射

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 投射源サブシークェンス | a,a' | c,c' | d | なし | なし |
| | ↓ | ↓ | ↓ | | |
| サブシークェンスgの投射先 | §257<br>§261 | §260 | §258<br>§259 | §257<br>§262 | §263 |

結果としてサブシークェンスgはシークェンス全体の縮図のような外観を呈するが、第二部シークェンス VII で見られたような思考の融合は生じない。対立する思考は対立するまま同じ場所に並べられるのである。続くシークェンス IV 以降ウィトゲンシュタインの思考は内的思考へと急速に傾斜してゆくのだが、このサブシークェンスgからそうした将来の方向を読み取ることは不可能である。両者の間にはウィトゲンシュタインの思考における多くの考量と選択が存在しているはずであるが、それはテキストにおいて全く姿を現さない。テキストに関する限り、両者の間にはただ飛躍が存在するのみである。

## 8 認識論的自然権を持つ共同確実性としてのムーア知 －シークェンス IV,V,VI－

シークェンス III において一旦方向を失ったかにみえるウィトゲンシュタインの思考はシークェンス IV 以降徐々にではあるが着実に一定の方向へと動き出し、最終的に『確実性』においてこれまで見られたなかった思考をシークェンス VI で形成する。それは第一部以来の思考運動の終結点であり、その結論とみなしうる思考である。第三部の最終部でウィトゲンシュタインが到達するこの思考を「認識論的自然権を持つ共同確実性としてのムーア知」と呼びたい。それはムーア命題に対する自らの認識論的権利を主張する点において第三部移行期以前の思考である事実の論理から決定的に区別される思考である。この権利は以下で明ら

かになるように自然権と呼ぶべきものであるが、それによって我々とムーア命題との関係は単なる確実性から知となる。それはムーア知と呼ぶにふさわしいものである。こうして最終的に形成される思考はこれまでに見出された多くの思考要素の統合されたものであり、三つのシークェンスをかけて徐々に形作られてゆく。どのような思考がどのような過程を経て形成されるのかを以下において見てゆきたい。

### 8.1 共同確実性としてのムーア知　－シークェンスⅣ,Ⅴ－

シークェンスⅣはムーアが蛮族に捕らえられるという奇矯な想定(§264)で始る。彼らはムーアが地球と月の間のどこからか来たのではないかという嫌疑を掛ける。ムーアは、そうでないと自分は知っている、と彼らに言うが、人間が飛行できるという空想的な考えを持ち物理学について何も知らない彼らに対しムーアは自分の確実性の根拠を示すことはできない。この架空の状況に対しウィトゲンシュタインは「これがあの言明をなす一つの機会であろう」(同)と言う。「あの言明」とはいうまでもなく「私は自分が地表から遠く離れたことがないのを知っている」というムーアの言明である。

以上の空想的想定とそれに対するウィトゲンシュタインのコメントは一見荒唐無稽に見えるが『確実性』の思考の流れの中で見れば次の二点において極めて大きな意味を持っている。第一にそれはムーア知肯定的知識観の初めての明示的表明であり、「私は月に行ったことがない」等のムーア命題に対し、それ自身より確かな根拠を与えることができないという理由から「私は・・・知っている」の適用を否定してきたこれまでの立場からの大転換である。それはムーア命題と我々の認知的関係（ムーア確実性）を「知識」と呼ぶことの是認であり、ムーア確実性が同時にムーア知である事を認めることに他ならない。これは一方で「私は・・・知っている」という表現の使用法を巡る事柄であるが、同時にムーア知という新たな知の存在を巡る事態であり、それに対応する新たな知識概念を巡る事態なのである。第二にこの想定が象徴的に示しているムーア言明の使用可能な場面とは、自らのものとは根本的に異なる世界像体系や言語ゲームとの遭遇であるということである。我々のものと根本的に異なる世界像体系とは我々の認識論的限界であるムーア命題を否定するような世界像体系であり、我々のものと根本的に異なる言語ゲームとは我々の言語ゲームの前提であるムーア命題の否定を前提とする言語ゲームである。それらをそれぞれ異体系、異ゲーム、と呼ぼう。ある認識者にとっての異体系、異ゲームとは単に自らのものと異なった世界像体系や言語ゲー

ムではなく、自らのものと語の最も強い意味で相容れない世界像体系や言語ゲームである。これまでも『確実性』においてウィトゲンシュタインは様々な想定を通じて我々のものと根本的に異なる異体系を登場させ、我々自身と異体系との認識論的関係を探求する素材として用いてきた。すなわち、異なる歴史学を持つ異体系(§188),異なる計算法を持つ異体系(§217)、等である。§264の蛮族は異なる物理学を持つ異体系の象徴である。蛮族をこうした象徴として用いながらてウィトゲンシュタインは異体系に対する新たな思考態度を表明しているのである。それは自らの体系の根本前提たるムーア命題の真理性を自分が知っていると言明する思考態度である。知の言明は通常自らの確実性の正当性の是認・要求であり、その正当性の是認・要求は相手と共有されている同一体系内部・同一言語ゲーム内部でなされるが、架空のムーアが直面したのは共通の言語ゲームが成立する可能性が否定されている状況である。つまりウィトゲンシュタインがここで表明しようとしているのは、あらゆる有効な言語ゲームの外部において自らの確実性の正当性を是認・要求しようとする思考態度なのである。この思考態度は「ムーア知」という一つの知の概念を要請するものであり、シークェンスIVからVIに至る思考はそれに応えようとする試みなのである。

**ムーア確実性とムーア知の結合(シークェンスIV)** ムーア知という概念を構成してゆく第一歩としてシークェンスIV(§§264-272)においてウィトゲンシュタインが試みているのは、今まで対立項として分裂してきた確実性と知識を結合することである。確実性と知識の関係については第一部以来スレッドδにより断続的に思考が展開されてきたが[16]、その間一貫して維持されてきたのは「確実性は主観的であるが知識はそうではない」(§245)という確実性と知識を対立させる思考であった。これに対し第三部シークェンスI(とりわけ§194)において主観的確実性と客観的確実性の区別という主題が思考されたということは、確実性と知識の無条件的な対立を考え直すという新たな方向にウィトゲンシュタインの思考が向かいつつあることを示すものであった。この新たな思考にシークェンスIVで具体的な内容が与えられるのである。こうしてウィトゲンシュタインが確実性と知識の結合を試みる背景には、次のような考察が存在していると推測できる。ウィトゲンシュタインが繰り返し強調してきたように確実性の表明は主観的な状態の表明であり、知識の表明はそうした意味での主観的状態の表明ではない。確実性と知識はそれ自身において相異なるものである。しかし知識が現実に我々

[16] 主要な箇所は、§§21,42,178,179,180,245.

において存在するその在り方を考えるなら、我々が知識として表明しうるものは同時に我々にとって確実なものである。我々に知られているものと確かと感じられるものは概ね一致する。これが偶然の一致であるとはおよそ考えられず、その意味で確実性と知識の間には深い内的な結びつきがあると考えざるをえないのである。シークェンスIVの思考はこの結びつきを解明しようとする試みであると考えられるのである。

具体的には、シークェンスIVにおいてウィトゲンシュタインは「有力な証拠」という概念を仲立ちとして知識と確実性を結合しようとしており、そうして知識と結合され同一視された確実性が客観的確実性と呼ばれる。§264でムーア命題に「私は・・・知っている」を適用しうる状況が示されムーア知の存在が容認され、その後§265で「私は・・・知っている」が「私は・・・有力な根拠zwingende Gründeを持っている」を意味することが示唆される。更に§270で「これらの[有力な]根拠が確実性を客観的とする」と言われ、我々が感じる確実性は我々がそれに対する「有力な根拠」を持つ時客観的となり、そうして客観的となった確実性が「知識」なのである、という思考が徐々に展開される。このようにして「有力な証拠」により客観化される確実性は単に一個人が感じる確実性ではなく、有力な証拠をそれとして共有する共同体により「感じられる」確実性であり、共同確実性とも呼ぶべきものである。しかし客観的確実性の持つこの共同性はシークェンスIVではまだ本格的に提示されない。それは「ある事に対して何が有力な根拠であるのかを決定するのは私ではない」(§271)という風に単に仄めかされるにすぎない。

**共同確実性と共同確実命題群（シークェンスV）**　客観的確実性にこの共同確実性という内実を与えるのがシークェンスV(§§273-283)の思考に他ならない。これまで客観的確実性という概念は極めて形式的なものであった。それが最初に登場した§194では「しかし何時あることが客観的に確実となるのか？－誤りが不可能となった時」と言われ、客観的確実性は論理的限界性の別名として提示されたのであり、我々一人一人が感じる確実性（主観的確実性）とそれがどのように関係するのかは全く触れられなかった。それゆえ「客観的確実性」と言われた時の「確実性」は抽象的で、我々が体験する具体的な認知的関係としてはほとんど内実を持たなかったといってよい。それに対してシークェンスVの思考では一群の一般的経験命題を仲立ちとして、我々のそれらに対する認知的関係として「客観的確実性」の内実が徐々に示されてゆくのであり、上述のようにそれは共同確実性と呼ぶにふさわしいものなのである。この一般経験命題群という概念は

上で「有力な根拠」と呼ばれたものの延長として§273で導入されるが、その内実は（一般命題として解釈された[17]）ムーア命題を部分集合とする常識的経験命題群である。それらを共同確実命題群と呼ぼう。

共同確実命題群は§273で次のように導入される。

> しかし何時人は何かについてそれが確実だというのか？
> というのも何かが確実かどうかについては争われうるからである、すなわち何時あることが客観的に確実かどうかについて。
> 我々に確実とみなされている無数の一般的な経験的命題が存在する。（§273）

ウィトゲンシュタイン特有の省略的な語り口ではあるが、ここで示されているのは「無数の一般的な経験命題」と我々の認知的関係こそが「客観的確実性」の本体であるという思考である。「無数の一般的な経験命題」を仲立ちとするこの思考経路は、明らかに「有力な根拠」を介して客観的確実性を説明しようとしたシークェンスIVの思考の反復であり拡張であるが、§273で示されている思考にはこれまで見られなかった一つの重要な要素が含まれている。それは「我々に確実とみなされているuns als gewiß gelten」における「我々」の使用である。一見するとこれまでの無数の「我々」となんら変わることのないように見えるこの使用は論述主体を表す一般的な「我々」ではなく、ムーア命題をはじめとする一群の経験命題の確実性に対してコミットしている「我々」であり、使用者ウィトゲンシュタインが自らをその一員として同定した上である具体的確実性にコミットしつつ用いている「我々」である。それは§218で初めて登場した限界を内的に表明する内的「私」に対応する内的「我々」なのである。内的「我々」の使用はシークェンスV以降のウィトゲンシュタインの思考を特徴づけるものであり、この使用を通じてウィトゲンシュタインは単に限界一般、知識一般、確実性一般について語るのでなく、特定の経験命題を自らが属する「我々」の限界・知識・確実性であると表明しているのであり、異体系・異ゲームを否定する内的思考を表明しているのである。参考のためシークェンスVにおける内的「我々」の全出現とシークェンスVIの内的「我々」の出現の一部を以下に挙げる。

---

[17]「私は地表から遠く離れたことがない」というムーア命題を一般命題として解釈するなら「如何なる人間も地表から遠く離れたことはない」となり、特殊命題として解釈するなら「私、G.E.ムーア、は地表から遠く離れたことはない」となる。『確実性』第三部で展開されている思考はムーア命題の一般的解釈を前提としている。

内的「我々」の出現

シークェンスV

§273　「我々によって確実とみなされている無数の一般的な経験命題」

§275　「この我々の確実性の根拠 」

§279　「我々が不可能と言うもの」

「我々が確実とみなすもの」

シークェンスVI

§286　「我々は皆月に行くのは不可能だと信じている」

「我々はそれを知っている」

§291　「我々は地球が丸いと知っている。地球が丸いことを我々は決定的に確信している」

共同確実性の媒体として導入された共同確実命題に対してシークェンスVでは様々の例が示されている[18]。その多くは「身体から切り離された手足は再び生えてこない」(§274)や「地面から自動車は生えてこない」(§279)のような奇妙で通常考えられることすらないようなものであるが、こうした例の選択は明らかに第二部シークェンスVI(特に§§152,153)で展開されたムーア信念のレリーフ起源説に基くものである。レリーフ起源説によればムーア命題の表現する信念はそれ自身が明示的に学ばれることはなく、他の信念が形成されてゆく結果それらにより周りからレリーフの如く固定された信念なのである。手足や自動車に関する命題はそうして浮かび上がってきたものの例である。

これらの共同確実命題群に対して「我々」が経験を介して持っている認知的関係が共同確実性であり、客観的確実性／ムーア知の本体なのである。シークェンスVでウィトゲンシュタインは共同確実性について以下の四つの特徴を示し、共同確実性という概念に内実を与えている。

第一にそれは具体的には「私、L.W」という一個人によって感じられている確実性である(§281,cf.§275)。ウィトゲンシュタインが「我々の確実性」と言う時考えているのはウィトゲンシュタインの魂を含んだ集合的魂が感じる確実性ではなく、「私、L.W、」という具体的個人の確実性なのである。この事態を確実性の個人性と呼ぼう。第二に「私」が共同確実命題に対する確実性を感じるにもかかわらず、それを確実とみなす経験的根拠を「私」は持っておらず、他人の経験

[18] 共同確実命題の例は§§274,279,281,282、で与えられている。

と他人への信頼を根拠として「私」はそれを確実とみなしている(§275,281)。このことは「我々」中のL.W以外の「私」についても当てはまるから、共同確実命題に対する経験的根拠は「我々」の中のいかなる「私」も単独の「私」としては所有することはできず、他人への知的信頼を介して「我々」の一員としてのみ所有できる[19]ものなのである。この事態を根拠の共同性と呼ぼう。本来「私」と共同確実命題群(ムーア命題群)との認知的関係であった確実性がこの根拠の共同性によって「我々」と共同確実命題群との関係となり、その限りで共同確実性と呼ばれるものとなるのである。第三にこうして「私」が「我々」の一員として所有しているかもしれない経験的根拠は単一の共同確実命題に対する根拠ではなく、体系をなす命題群全体に対するものである(§274)。第三部シークェンスIIIeを始めとしてこれまで繰り返されてきたこの思考は根拠の体系性と呼ばれるべきものである。第四に「我々」の中の各「私」が共同確実性を形成する過程は受動的である(§§280,282,283)。各「私」は子供の時教えられたことを受動的に信じ、特段の理由がなければそれを疑わない。こうした習性を通じて共同確実性が形成されるというのが確実性の起源に関するウィトゲンシュタインの根本的な考えである。第二部シークェンスIII,VIに発するこの思考は確実性の起源の受動性と呼ぶべきものである。以上の四つの特徴により限定される「我々」と共同確実命題群(ムーア命題群)との経験を介した認知的関係が共同確実性である。共同確実性を介して我々と結ばれているこの共同命題群がやがてムーア知の本体とみなされてゆくのだが、この段階では未だそれは全貌を見ることのできない想定上の建物に喩えられているにすぎない。

> 我々はいわばこの大きな建物がここにあると信じているのである。ある時にはこちらにその一つの小さな角を、別の時にはあちらに一つの小さな角を見ているのだと。(§276)

### 8.2 自然権を持つ共同確実性としてのムーア知 ―シークェンスVI―

一個人の経験は有限であるばかりでなく極めて限定されたものである。それゆ

---

[19]「根拠を所有できる」は「根拠を所有している」とは異なる。§275でウィトゲンシュタインが言っているのは「もし経験がこの確実性の根拠であるのなら、それは私自身の経験ではなく、私が知的に信頼する他人の経験である」ということであり、この確実性には現実に経験的根拠が存在する、ということではない。ここでは未だ開封されていない共同確実性の現実の根拠の有無という問題がシークェンスVI, VIIの思考の端緒となるのである。

え多くの個人は、ウィトゲンシュタインがそうであったように、「一度切断された手足は二度と生えてこない」といった命題を確信しているにもかかわらずそれに対する直接の経験的証拠を持っていない。

このため共同確実命題に対する個人の確実性の根底には必然的に他人に対する知的な信頼が存在する。共同確実命題群に対する我々の認知的関係をそれぞれの「私」の個人的体験を起点にして考える限りこの信頼に十分な根拠を与えることはできない。何故なら我々は何らかの根拠に基いて他人を信頼しているのでなく、あらゆる認知的関係の出発点として他人を信頼してきたからである。それゆえこうした個人的観点に立つなら共同確実命題群との認知的関係は「信じている」であり「知っている」ではない。これがシークェンスV(§276)において我々の共同確実命題群との認知的関係が本当の建物でなく想定上の建物に喩えられた理由である。

シークェンスVIで試みられるのはこの共同確実命題群との認知的関係を「信じている」から「知っている」に転化することであり、共同確実性を知として捉えることに他ならない。上の考察が示すように「私」とその個人的経験を起点とする限りこれは不可能である。従って共同確実性が経験に基づく知であるためには、独立した認知的主体としての「私」の存在を前提とせず、それに先立つ独立した認知的主体としての「我々」とその集合的経験を基準として共同確実命題群との認知的関係を考察することが必要となる。言い換えるならそれらを「私」が知っているか否かの考察を前提としないような形で「我々」がそれらを知っているかどうかが考察されねばならない。こうした「我々」とは単に多数の「私」を包含するのみならず、多くの「我々」の世代をも包含する時間的・空間的な広がりを持つ認知的主体である。「我々」がこうして積み重ねてきた経験を介して共同確実命題群に対して持っている認知的関係が知と呼びうるものであるのかどうか、これがシークェンスVIの根本問題である。そしてそれに対してウィトゲンシュタインが提示する解答が認識論的自然権と我々の呼ぶものなのである。以下この問いと答え巡りウィトゲンシュタインの思考が第三部の最終部でどのように展開してゆくのかを見てゆこう。

**人類の非表明的共同確実性の自然誌(§284)**　こうした考察を前提とするなら、スタイル、内容の双方においてこれまでと大きく異なる§284が,実は唐突なエピソードではなくそれ以降の思考の流れに対する主題提示という大局的意味を持った重要なテキストであることが明らかとなるだろう。この小節は人類が太古の昔より動物を殺しその皮や骨を様々な目的に利用するという経験の反復を通じて集

団的に形成してきた動物に関する解剖学的信念（「同種の動物には類似した部分がある」）についての叙述である。こうして叙述される人類の集合的信念には次のような三つの重要な特徴が込められており、それらはこれ以降の思考において更に展開されてゆく。

第一に§284における人類は上で述べたような時間的空間的に広がりを持つ共同認知主体とみなされており、後にそれはウィトゲンシュタイン自身によって内的に「我々」として語られることになる。第二にこうした共同認知主体としての人類の信念として取り出されるのは、人類自身によって言語的に表明されるとは限らず、何よりその行動から読み取れるような信念なのである。こうした行為に現れた（そして必ずしも語られるとは限らない）信念や知識を非表明的信念、非表明的知識[20]と呼ぼう。非表明的信念や非表明的知識は言語ゲームの存在を前提としないものである。第三はここで叙述される非表明的信念は共同認知主体としての人類が「経験から学んだ」ものであると言われていることである。この経験との関係が人類の非表明的な共同確実性に自然権を与えるのである。ただし§284では共同認知主体としての人類が経験から学んだ非表明的な共同確実性の成り立ちが一種の自然誌として記述されているにすぎず、我々がそれに対する認識論的権利を持っているということは、それに続く思考において探られるのである。

**非表明的共同確実性の非証明的正当化の源としての認識論的自然権**　シークェンスVIの思考は§284で記述された非表明的共同確実性の正当性を探って展開されるが、それは正当化の存在しないとこれまで言われてきたものの正当化を求めることであり、様々な問題を孕まざるをえない。とりわけ次の二つは重要である。第一は認識と行為の関係に係わる問題である。『確実性』においてこれまで一貫して主張されてきたのは、正当化には終わりがあり、その終わりとは無条件で無根拠な行動様式である、という考えであった[21]。例えば「私には二本の手がある」といったムーア命題はこうした正当化の限界に位置しており、それが確実であるとは「私」がそれに従って無条件に行動することを意味しており、それに対して揺るぎ無い根拠がある事を意味するのではないのである。この考えによるなら我々の全認知体系の根本には我々が無条件にこのように行動しているという事実が横

[20] 語られることなく行為に示されている信念や知識という概念は§7ですでに示されていたものである。それは§285でもう一度反復される。
[21] この考えは§§110,196,204,250−251、において表現されてきた。

たわっていることになる。認識と行為の関係に即して言うなら、これは行為を最終項とみなす考えでありその意味で行為主義と呼びうるだろう。

この行為主義にあって自らの規範体系を正当化する行為は、「我々は現にこのようにしている」という事実の記述、すなわち事実の論理で終わるはずである。もしウィトゲンシュタインが非表明的共同確実性に何らかの正当化を与えようとすれば、それは事実の論理から内的思考への移行であるばかりでなく、行為主義から（認識を最終項とするという意味での）認識主義への転換とならざるをえないのである。人類が特定の油を求めて特定の動物を何世代にも亘って殺し続けてきたとすれば、この行為に対応して「・・・の動物には・・・の油がある」という非表明的共同確実性が存在する。行為主義によれば人類がこのように行動してきたという事実がすべての根拠であり、この事実そのものには如何なる根拠や正当化もありえない。他方認識主義によるならこの行為はそれに対応した非表明的共同確実性が正当化された場合にのみそれを介して正当化されることになる。シークェンスVIでウィトゲンシュタインは後者を試みているのだが、そこではこうした大変化が思考の様々な領域に及ぼすであろう余震は未だ思考されていない。第二は正当化というものがそもそもどのような存在かという問題である。正当化の存在が最も明確なのは言語ゲームを共有する言語的主体間でなされる場合であり、その場合正当化とは言語ゲームによって規定される言語行為に他ならない。他方で認識や信念が存在する（と考えられる）にもかかわらず正当化が明らかに存在しない状況が存在する。それはリスのように非表明的認識を持つ非言語的存在者の間である。今正当化が問題になっているのはこのいずれにも属さないケースである。それは我々が参加しうるあらゆる言語ゲームにおいて共有され前提されている非表明的確実性を正当化しようというケースである。この正当化は言語ゲーム内部で存在し得ないし、又その必要も無い。こうした正当化をウィトゲンシュタインは長い間有意味性の限界を超えるものとして拒絶してきた[22]。この禁じられた問いの扉を開けるに当たって我々は次の二つの問題に遭遇せざるをえないだろう。第一は参加可能なあらゆる言語ゲームの外部において自らの非表明的確実性の正当化を一体誰に対して何のためになすのか、という問題である。正当化が言語ゲーム内でなされる時こうした問題は生じないが、一旦言語ゲームと独立に正当化を考えるとこれが問題となる。第二は仮にそうした正当化が存在しうるとして、それはどのような基準でなされるのか、どのような時正当化とみなさ

[22] 注15参照。

れるのか、そしてそれは何故か、という問題である。シークェンスVIの思考はこれらの問いを主題的に扱っていない。ウィトゲンシュタインの思考運動の在り方を考えるなら、これらが今後の思考の展開の潜在的な動力になってゆくだろうこと我々は予想しなければならない。

非表明的確実性の正当化の可能性を探る第一歩としてウィトゲンシュタインは§287でリスを引き合いに出して帰納法に依らない経験的正当化（非帰納的経験的正当化）を次のように示唆している。

> リスは帰納法によって次の冬も貯えが要ると推論するのではない。同様に我々も我々の行為や予測を正当化するのに帰納法則を必要としない。（§287）

ここではリスと人間を巡って次の四項の間のアナロジーが試みられている。

| | |
|---|---|
| リス | リスの非表明的予測と行動 |
| 人間 | 人間の非表明的予測と行動 |

しかしこのままではアナロジーは意図された通りに機能しない。何故ならリスとその非表明的予測と行動の関係は「信念と習性の形成」と表現されるものであるのに対し、ここで要請されている人間とその非表明的予測と行動の関係は「正当化」だからである。前者が事実の論理の枠内に収まるのに対し後者は内的思考を必要とする。もしリスとその非表明的予測の関係を我々の非表明的予測の正当化のモデルとするのならば、前者の内に単なる信念と習性の形成を超えた要素、何らかの正しさの萌芽のようなものを認めなければならない。それはリス達が代々環境との反復的な係わりの中で形成した信念と習性の中に宿る正しさの様なものでなければならないだろう。この正しさは人間の非表明的予測と行動を正当化するものである。この正当化は帰納法によるものではなく、如何なる意味においても「証明」とみなしうるものではない。それは時間的空間的に広がりを持つ認知主体としての種の集合的経験の累積から生じる正当化である。上の§287と次に挙げる§295の間にはウィトゲンシュタインのこうした思考が存在していると考えなければならないだろう。

> それゆえこの意味において命題には証明が存在するのではないか？しかし同じ事が繰り返し起こったというのはそれに対する如何なる証明でもない。た

だ我々は、それはそう想定する権利(ein Recht)を我々に与える、と言うのである。(§295)

一見唐突に出現するかにみえる「権利 ein Recht」という言葉は既に第三部シークェンス Ib(§§201-2)で新たな問題を指し示すために用いられたものであり、ここでの使用はその問題を直接に継承している。§§201-2 でウィットゲンシュタインは、ムーアは我々には記憶や知覚を証拠として信頼する権利があると言おうとしたのだ、という解釈を示した。ここでは問いをその権利の源泉へと一歩進めた上で、事象の反復的生起がこの権利の源泉として示唆されているのである。この事象の反復的生起は個人が個人として経験しうるものではない。それは人類とかリスといった時間的空間的広がりを持った認知主体が集合的に経験するものなのである。それゆえここで「権利」という言葉によってウィットゲンシュタインが示そうとしているものは、種と環境の係わりの反復的累積に内在する認識論的権利であり、言語的主体や言語行為の存在を前提としない根源的な認知的正しさの源泉でとしての権利である。それが我々に記憶、知覚をはじめとする様々なものを信頼することを許すのである。それは認識論的自然権と呼びうるものである。この認識論的自然権の許す原初的信頼に基いて言語ゲームが可能となり、その言語ゲームの内部において真理、証明、検証、等の認識の正しさに係わる概念が成立するのである。

認識論的自然権を想定した以上の正当化を非証明的正当化と呼ぶなら、§295 に至る一連の思考においてウィットゲンシュタインが示しているのは、我々人類の非表明的共同確実性を非証明的に正当化する一つの道筋に他ならない。そしてその結果到達されたのが「非証明的に正当化された人類の非表明的共同確実性としてのムーア知」という概念なのである。これはムーア命題の「私」を「私、G.E. ムーア」としてではなく任意の「私」と解釈し、ムーア命題を一般命題と解釈した上で、ムーアの言明に宿る真理を取り出そうとしてきたウィットゲンシュタインが最終的に到達した思考であり、共同ムーア知と呼ぶべきものである。共同ムーア知は非表明化・前提化された人類の共同認識であり、その世界像の源泉である。現在の人類が持つムーア知は太古の人類のムーア知とは大きく変化し、大まかには「非表明化され前提化された科学的認識」というものにほぼ等しいと言えるだろう[23]。我々の共同ムーア知としてその正しさがこのように確立された共同確実

[23] §293 では確実な命題の例として「水は 100℃で沸騰する」が挙げられている。

命題に対して、ウィトゲンシュタインは内的「我々」によって「我々は・・・知っている」という知の表明をなす(§§286,291)と共に、異体系に属する架空の人々に対して「彼らは間違っている」と明言する(§286)のである。こうしてムーア命題の普遍的解釈に立脚したウィトゲンシュタインの内的思考は完結する。

**共同ムーア知における「我々」と「私」** 以上第三部でウィトゲンシュタインが結論として到達した思考を通覧した。その中でただ一つ取り残された重要な思考要素を最後に考察し、本論を閉じたい。それは共同ムーア知における「我々は知っている」と「私は知っている」の関係である。デカルトの『省察』が近代認識論のモデルであるとするなら、その基本的立場は「私」と「私」の経験を起点とすることであり、それによるなら「我々は知っている」は「我々」を構成する多くの「私」による「私は知っている」に基いてのみ成立するものである。

第三部シークェンスV(§§275,281)で「私」と共同確実一般経験命題群の認知的関係を探った時、ウィトゲンシュタインはデカルト的立場に立っていたと考えられる。そこで示されたのはデカルト的認知主体としての「私」がそれらの命題に対して持つ確実性の根拠は「私」の経験の内には存在しないということであった。だからといって経験を超えたアプリオリな原理が「私」の確実性の根拠になっているのではなく、他人の経験に対する信頼がその根拠になっているのである。それゆえデカルト的立場からすれば「私」がこれらの一般経験命題を知っていると言えるには至らず、「我々」についてもまた「知っている」は成立しないのである。上で考察したシークェンスVIのウィトゲンシュタインの思考の本質的特徴はデカルト的立場から非デカルト的立場へと移行した上で一般経験命題と「我々」の認知的関係を探ったことにある。

第三部の最後の思考要素とはこの非デカルト的立場に立つ時「私」とそれらの命題の認知的関係はどのように捉えられるか、をめぐるものである。先ずこれまでのウィトゲンシュタインの思考の流れにおける非デカルト的立場の系譜を振り返っておこう。そもそも言語ゲームという着想の中に非デカルト的立場が萌芽的に存在していることは明らかであるが、『確実性』に限定するなら信念の受動的起源と個人の認知的主権の抑制という二つの思考要素が非デカルト的立場の先駆として認められる。信念の受動的起源はこれまでも繰り返し触れてきたものであるが[24]、認知主体としての個人は先ずそれを取り巻く共同体からの教育を受容することから始るという思考それ自身は非デカルト的立場そのものではないが、後

[24] この思考要素については§§106,143,144,283を見られたい。

で見るように、非デカルト的立場から「我々は知っている」と「私は知っている」の関係を説明する際の根本的な思考となる。

他方個人の認知的主権の抑制とは認知的な正しさの確立における「私」の「我々」への依存を意味するのだが、これまでは§§171,271において断片的に見られたのみである。§171では「自分は月へ行ったことはない」というムーアの想定の主要な根拠は誰も月へ行ったことはなく、月へ行くのは不可能である、ということであると述べられ、ムーアの言明の根拠が彼自身の経験であるというよりは彼が「我々」として知っていることであることが示唆されている。

また§271では「何が有力な根拠であるかを決めるのは私ではない」と、「私」の認知的独立性の制限が示唆されている。こうした箇所において先行的に予示されてきた思考が認識論における非デカルト的立場としてシークェンスVIにおいて明確な姿を現したのだと考えられる。

非デカルト的立場おいて認知主体としての「我々」は信念を共有する「私」の単なる集合ではなく、ある特定の仕方で組織された「私」達でなければならない。その組織の仕方とは、それを通じて「私」が「我々」の一員たる認知主体として生成されるようなものであり、今日広く教育と呼ばれているものに相当する。それゆえ「我々は・・・について確実である」とはこのように組織された「我々」に属する各々の「私」について「私は・・・について確実である」ことを意味するのでなければならない。『確実性』第三部の最後を飾る§298で示されているのはこうした思考である。

> それについて我々は確実である、という表現は各個人がそれについて確実であるということのみならず、我々が科学と教育により結び合わされた一つの共同体に属しているということをも意味しているのである。(§298)

認識論的自然権を持つことにより「我々」が共有するこの確実性は共同ムーア知と呼びうるものとなる。このムーア知を「私」の立場から見れば、それは「私」が属する共同体から「私」へと伝達されたものであり、この伝達に根拠を持つ「私」の「我々」への所属によって「私は・・・知っている」という事態が成立するに至るような知識となる。次の§288でおよそこうした思考が探られていると考えられる。

> 私は地球が自分の生まれるはるか以前から存在していたことを知っているの

みならず、地球が球体であり、それは確立されているということ、私や他の人間に多くの先祖があること、これらのこと全てについて書物が存在しそれらは間違っていないこと、等をも知っている。私はこれら全てを知っているのか？私はそう信じる。この知識体系 Wissenskörper は私に伝達されたのであり、それを疑う如何なる理由も私にはなく、様々な確証があるのである。(§288)

この思考においてウィトゲンシュタインは認知主体としての「私」に対し「我々」を優越させ、認識論上の非デカルト的立場に立っている。この非デカルト的立場はムーア命題の公的解釈によって暗に要請され続けてきたものであり、様々に予示されてきたものである。しかしながら認識の究極的主体を巡る問題に関してウィトゲンシュタインがここに最終的な均衡点を見出したとは未だ結論できない。問題は「私」の知識のどれだけが「我々」に由来するのか、である。もしそこに「我々」ではなく「私」にのみ由来する重要な知識が存在するのなら、我々は次の問いに直面せざるをえないのである。「私は・・・知っている」という言明においてG.E.ムーアが表明したのは「我々」に由来する知識なのか「私、G.E.ムーア」に由来する知識なのか。元来単なるムーア解釈を巡るものであったこの問題は、これまでのウィトゲンシュタインの思考によってデカルト的立場と非デカルト的立場の関係を巡る問題、「私」と「我々」の関係を巡る問題へと拡大してきたのである。その結果ここに新たな思考系が浮かび上がってくるであろう。『確実性』第四部とはおそらくそうした思考系を巡る物語なのである。

(メールアドレス:kikai@sakura.cc.tsukuba.ac.jp)

Wittgenstein's Thinking in *On Certainty* (2) —Through an analysis of its part three(§§192-299)—

This paper tries to show the movement and the conclusion of Wittgenstein's thinking in the part three(§§192-299) of *On Certainty* by using my methods of analyzing the structure of Wittgenstein's actual thinking developed in my previous papers. It has two main conclusions. As for the structure of the part three of *On Certainty*, my conclusion is that this is the place where Wittgenstein's thinking about limits shows a major transition from 'external stand point', which dominates its part two (§§66-191), to 'internal stand point', which appears here for the first time in *On Certainty*. As for the contents of Wittgenstein's thinking of part three, I conclude that he reaches a concluding thought which may be called 'Moorean knowledge as common certainty endowed with natural right'. In this concluding thought, Wittgenstein approves Moore's knowledge claim as he understands that.